

いかにもうれしくおもひけむ
手をあはせつゝをろがみぬ
三たひ五たひ九のたひ」
あれたる軒に駒つなぎ
夜半に秣をもとむれば
まよへる魂がかかげ青く
もえて立つなりこゝかしこ
つぎの
カザンは遠き雲のよそ
ベルンもあとにエカリテン
こゝよりウラルの峰さして
たどる山路は三百里」

わが乗る駒の名にちへる
ウラルの山の峯づたひ
てる日の影のはげしさは
鎔けむひづめのくろがねも」
いたゞきちかくなりぬれば
空のけしきもかはりきて
こえゆくわれを駒ながら
ふきもとばさむ山あろし」
吹くよと見ればひとむらの
雲こそくだれ高嶺より
夕立つ雨をさかまきて
神もかしらの上に鳴る」
進むゆくても見えざれば
手綱ひかへて立つほどに

雨はさながら矢の如く
中にまじれり真砂さへ
物にはおぢぬわが駒も
立髪振るよとおもひしが
この烈しさにおどろきて
後に躍れり一丈ばかり
たちまち雲もはれゆきて
雨もあとなくなりたれば
濡れたるきぬをうちまぼり
まぼしたちよる松の蔭
葉ごしに遠く虹たちて
見るもすゞしき大空に
ねたや歸るに如かじとて
ひとこゑ鳴きぬ郭公

猶ゆきゆけばなる雷の
あらひしあとかうのぼ木に
栖めるあら鷺巢ながらに
焼かれても見ゆ親も子も
われいたゞきにのぼりきぬ
はやいたゞきにわれつきぬ
こゝは亞細亞と歐羅巴
そのふたかたの境界とよ
にほふ夕日のかの末は
いづこなるらむセルマンか
いてたる月のかのほとは
いづこなるらむ日の本か
今夜はこゝにやどりして
むすぶ夢路も西ひがし

別れわかれてめぐりけり
わがふるさとにペルリンに
空ふく風にねざめして
ゆく露白き巖の上
ねながら見れば枕邊に
影いとちかし北極星

つぎの二

ウラルの山をくだりきて
チウメンわたり過ぎゆけば
疫ペストのやまひひろごりて
なやまぬ里もなかりけり
醫師もあらぬ里なれば

なやむまにまに死にゆきて
朝にゆふべに屍やく
煙はつきず野に山に
ある山ざとにかゝりしに
こゝはひとしほはげしくて
妻に夫に子に孫に
死ぬるも見えつあばら家に
人しすまねば板びさし
はやかたぶきてかげくらく
てらせる月のさ夜中に
くふるふの聲すなり

つぎの三

イシムイシムの河に日はくれて
道もわかねば走るべにと
やとひしものは逃げゆきて
かげはた見えすふくる夜に
胸の磁石（胸）をうちながめ
手にもつ地圖をひらき見て
そこともまらず只ひとり
月のひかりにたどりゆく
アソとトボリの二かたに
分るゝ道のあるなりと
かねてきしを今たどる
道はいづれのかたならむ
トボリのかたにあらざるか
アンに向はむわれなるに

道はいづれのかたならむ
トボリのかたにあらざるか
たづね問はむも家はなく
案内させむも人はなし
人すむ家の見ゆるまで
すゝめわが駒ともかくも
里あるかたを見出てなば
こよひはそこにやどらむと
あやしき虫のこゑごゑを
ふみて分けゆくすゝき原
あきそふ露に秋まりて
道のかたへにさきにけり
桔梗（桔梗）かるかやをみなへし
葛（葛）なでし子にふぢばかま

月のひかりに手をりきて
あななつかしとかぞふれば
わがふる里の七くさに
ひとくさたらず萩のはな
とある山べをのりゆけば
かや原いたくさやぐなり
あさる蟒蛇か伏せる猪か
とがめて駒もいなさぬ
さまよひゆけばはりがねの
たよりの柱ぞ見えにける
はりたる線をかぞふれば
あはれ四すぢのいとし
やがて知りけりこの道は
アンの向へる道なるを

うれしといひて鞭うてば
駒もこゝろもいさむなり

つぎの四

アンのうまやお後に見て
セミバランチスこゝろざし
こえゆく道のけはしさに
あまた日數はつもりけり
サイザムの市も秋たけて
イルチス河に冬はきぬ
のぼる山路の風さむく
はやくもふれりはつみ雪
ゆけどゆけどもゆく人の

かげもあらしの夕まぐれ
あやふき峰のかけ橋に
木葉みだれて猿ぞ啼く
アルタイスクのその里は
名におふ山のふもとなり
今夜はここに明日はまた
こえなむ雲のそのあたり
あふぐも高きアルタイの
峰よりおろす朝ふゆき
手綱とる手もこぼるまで
ふりこそまきれ駒のうへに
みどりの色のかげとては
残るひと木の松もなし
かしこの澤にここの峰

見ゆるかぎりはましろにて
高くそびゆるその峰を
心の志をりに昨日今日
たどりたどりてわけのぼる
み雪はいく重八重の雲
たのむやどりは洞のうち
さむきいはほのそのまくら
雪うち噛みてまどろめば
こぼりがちなり夜半の夢
いなく駒にめざむれば
餌にうゑたる狼の
あやしや枕にちかづきて
わがひとり寐をねらふなり
腰の短銃手にとりて

二たびはなつその音に
うちあどろきて逃げつらむ
かなたに高しさけぶこゑ
洞より出ててわれ見れば
月のひかりはさえさえて
深くつもれる雪の上に
むらむらのこすその血しほ

つぎの五

駒をひかへて見おろせば
千山萬岳いと低く
雲はとざせり北氷洋
煙はまよふ亞細亞洲
こゝろあどりのせられつゝ

ころもふるひてうそぶけば
空さへちかきこゝちして
手にもとるべし夕日影
腰の刀をぬきもちて
立てるいはほにつも雪を
うちはらひつゝ今日こゝを
われこえたりと彫りてけり
あはれアルタイ汝こそは
高き峰とて天がまたに
名はとゞろきて聞ゆなれ
さはいへこゝにのぼりきて
立てば汝よりあのが身の
高きはいかにとほこらひて

問へどこたへず天つ風
高嶺をあとに下りきて
あなたを麓にいてぬれば
ひろき露西亞も限りにて
今ぞ乗り入る蒙古の地」

つぎの六

山また山をたどりきて
疲れはてけり駒も吾も
日影はいまだ高けれど
やどりはすべしスヲツクに」
この里にもこゝまもる
つかさのあるときゝにけり

いでやたづねむその館
こよひの宿をはかるため」
かゝるつかさのならひにて
ほこれるさまはいひもえず
高きとのゐに坐をまめて
われをひきけりその下に」
わが行くさまも語らひて
よき便をばこひたるに
あななさけなやなさけなく
いなみてけりな知らずとて」
かなしといふもこゝろあまり
つらしといふも程足らず
にくしそのさまのことば
程もこそあれ悔るも」

きりて棄てむと柄に手を
かけはかくれどわがになふ
つとめの重きそがために
ぬきもはなたず劔太刀」
疲れし駒をまた追ひて
あとに見なせりスオツクを
夕日はおちてひろ野原
分けゆく雪に道白し」
かすかに見ゆるともし火の
かげをたよりにとめくれば
こゝは牧場かえみしども
酒などのみてなみゐたり」
おほへる幕のそのほかを
守れる犬はさが荒く

牙もあらはに聲立て、
吠えかゝるなりわが駒に」
えみしらあまた立出でて
いふ言の葉はわかねども
なさけありげに見えたれば
やがてやどれり幕のうちに」
毛皮の幕を庵として
中には敷けり皮むしろ
熊クマの膏火カウにたきて
照らす焰もなまぐさし」
柴さしくぶる土の爐に
炙るはなにの肉ならむ
もの食ふ皿にうづ高く
盛れるは馬かばた熊か」

つねならませばこの庭よ
睡をも吐きて過ぎましを
こよひはねたりわびしとも
思はてねたりうまいして」

つぎの七

コプトーリヤスゆきすぎて
ウラムブジョーにやどりしぬ
明日は朝とく起き出でて
立たむと思ふをおもひさや」
ふけゆく夜半の夜あらしに
日ざめて見ればこはいかに
かしらいたみてこゝかしこ
くるしかりけり胸に脊に」

サザンの夏もアルタノの
冬も志のぎてすゝみこし
われにはあるを今さらにな
なにかさやりてかゝるらむ」
強ひて立ちなばなかなか
まさりもやせむこのなやみ
こゝろならねどこの里に
今日のひと日はありけるが」
なさけを老らぬえみしらは
なやめるわれをのゝしりて
せめてのまむの牛の乳も
あたへざりけりこゝろよく」
夜に入るまゝにつかれきて
そのわびしさに堪へざれば

上著かぶりてふすほどに
いつしかとなくまどろみぬ
日數つもればはてもなき
シベリヤの野もゆきすぎて
ウラジオストクとくとくも
その浦をば船出せり
浪風あらし海のうへ
ゆられゆられてかぢまくら
さしてぞいそぐたくなはの
ながき船路の長崎に
赤馬が關は夜すぎて
周防播磨の灘づたひ
須磨と明石のあけがたに
見ゆるもゆかし淡路島

武庫の湊に船よせて
まばしはそこにいこひしが
都のかたのこひしさに
こより陸を汽車にて
生田の森のいくほども
ゆかじと思ふを難波がた
みじかさあしのふしのまに
はやくもすぎつ山崎を
西のみやこに日はくれて
月もうち出の濱風に
長き旅幣のうきちりも
はれてあとなき伊吹山
わが身のをはりはわかねども
神にちかひて世のかぎり

こゝろつくさむ國のため
なるかならぬかなるみ海
音さゝ山の音たてい
ほしる車ははやけれど
歸りをいそぐわが身には
遠くこそあれ遠江
かの凱旋を二川の
ふたゝび見るはかたからむ
ひく馬の野べに名ときくも
なほ志ぼらるゝわが袂
天龍川の月影も
ふけゆくさ夜の中山に
かゝりしころは夢に似て
うつゝともなしうつ山

あけゆく空を志づ岡の
心まづかにながめむと
たのみあきつるかひもなく
見ずてすぎけり清見がた
流れのはやき富士川も
いつかわたりてうき島が
原吉原の松かげに
たちまち見ゆる箱根山
われをまつてふ吾妹子を
みしまの里ときくにだに
こひしきものをこゝにまた
ならびて立てり二子山
高きたかねをこゆるぎの
濱へに出てて浪よする

大磯小磯いそぐなる
こゝろはたれもまらざらむ
戸塚平塚程が谷の
ほどもあらせず横はまの
市にしくればわれまちて
あまたの人はみちみてる
新橋わたりさこゆるは
われをいはひのものゝ音か
右に左にうちあぐる
花火は空にみだれつゝ
車をおりはおりたれど
あゆみを運びははこべども
迎の人のまげくして
ゆきもやられず通りえず

いかなる人のむれならむ
こゝにつどへり人あまた
いづこの人のむれならむ
かしこにも見ゆ人あまた
馬に車に立ちならび
旗に袂にうちつらね
つゞきつゞきておのづから
垣をばなせり大路小路
駒にまたがり鞭をとり
ほ手うつ音に歌うたふ
聲の中をばふみわけて
家にかへれりわが家に
今かへれりといふこゑを
さゝし妻子やいかならむ

妻は刀にとりすがり
手らは袂のみぎひだり
うれしかなしはあとにして
まづ天皇にまみえなむ
ころももかへむ太刀もてこ
駒に鞍おけまぐさかへ
門にいなくそのこゑは
ウラルの聲とおもひしが
二こゑ三こゑきくほどに
さながら似たり凱旋に
あやしあやしといひいひて
立たむとすればこはいかに
やまひの床にはかなくも
まばしむすびし旅の夢

さめておどろく枕べに
残る燈火影やせて
夜やふけぬらむえみしら
ふく笛遠くさえわたる
わがふる里のこひしさに
夢にも見しかふる里を
今はいづこと妻子らも
こよひわが身を夢むらむ
やまひはすれどこの里を
明日は立ちなむこのことを
はやくもつげよふる里に
あはれみ空のかりのこゑ

クウロンの北バイガルの
湖のわたりやどりして
今朝立ちくれば氷より
いづる朝日も影さむし」
夏ならませばすゞみても
ゆかましものをみぎには
雪ふりつみて風さゆる
蘆の枯葉に百舌を鳴く」
イビチクすぎてわけのぼる
高峰はすべて松ばかり
梢のあたりふく風に
をりをりあつる雪なだれ」
駒もなづみぬえはしとて

まげる木陰に立ちよれば
なだれし雪にあさましく
打たれて死にし熊もあり」
麓の里にくだりきて
その名をとへばキラノル
こゝに蒙古もゆきすぎて
はじめてかゝるサイペリヤ」

つぎの九

月をばとへばその月は
一月のはじめと人いへど
空はくもりて風つよく
ふりにふりそふ雪あられ」

いかにふくらむふく風は
いかにふるらむふる雪は
鳥達の川原に水とちて
あつくこほれりあつごほり
昨日も今日もその川の
氷のうへをのりゆけば
駒のひづめに音ありて
をりをり開ゆさむきこゑ
騎りゆくわれもさむけきを
のらるゝ駒やいかならむ
いづる汗さへこほりきて
垂氷さがれりたてがみに
この木かげに雪はらひ
かしこの岸に風をさけ

氷のうへは五十五里
ゆけどゆけどもなほつきず
雪はいよいよ降りまきり
風はいよいよ吹きすすさび
宿はとれどもその宿の
名をだにわかず里あれて
風に夢さへむすばねは
あき居てひとりあかしに
つなげる駒もねぶらずて
夜すがら啼きぬあはれげに
ゆきては宿りやどりては
また行きゆきてまたやどり
やどるやどりはかはれども
寒さはあなじ風と雪

雪はくだけて空にとび
空はあらしにかきくもり
見えすなりけり今見えし
ちかきすぎ原また檜原」
手綱とれどもわが手とは
おもはれぬかなこのあした
駒のいぶきもこぼりきて
なるやくつわの音さむしは
夕はいとゞ風さえて
ふりくる雪のひまもなく
いくたびわれははらへども
またまたつもる駒の脊に」
こゝはいづこかクリカスヤ
さびしき里とは見ゆれども

駒のつかれをなぐさめて
こゝにやどらむくれぬまに」
氷のうへをふみをへて
こゝまで二十七里半
みちは遠くはあらねども
いつかわすれむこのつらさ」

つぎの十

ゆうべの宿をあとにして
こよひの宿をもとめしに
こゝに里あり里の名を
人はよびけりドンナヤと」
原のはてなるをちかたに

そびえてたてるその山は
やがてレナ河黒龍江
この二河の源にして」
レナのながれは北氷洋
黒龍江は日本海
北と東に立ちわかれ
ながるゝ水のはてもなし」
のぼるともなくのぼりきて
いつか高嶺にのぼりしが
こゝにて東にむかひたる
あのがこゝちやいかならむ」
峰のひがしのはなれ里
そこに一夜をおきあかし
つぎにかゝるは乞塔府

こゝに五日をすごしてき」
チタをばすぎてニルステク
七日ばかりのこの旅路
つちをばふまずいつもいつも
氷のうへに雪のうへ」
ことにカバノウスコイてふ
里にかゝりしゆふぐれは
眉も睫毛もとぢられて
まばしはあかずわがまなこ」
什耳喀の川の右のかた
蘇喀勒尙斯克この里に
二日やどれりあはれこの
什耳喀の川の右のかた」
宿のあるじはポーランド

かしこの人にてありけるが
魯西亞の兵にとらはれて
流されにたり西比利亞に」
旅のこゝろのつれづれに
すぎしむかしのこととへば
腕をまくりて見せにけり
劔のあとに銃丸のあと」
そこをば出でて烏乞喀羅
たのみたのみてゆきつげば
いづこの里もうちいなみ
われをやどさむものもなし」
日もはや西にかたぶけど
すべもあらねばまた立ちて
やどる川べの夕風に

鳴くは千鳥の群ならむ」
枯れてをれふすあしの葉を
のりゆく駒の足あとに
ゆめやぶられてにげゆくは
狐かそれかかはをそか」
ゆめもむすばぬさ夜中に
くらきともしびかきたて、
寒暖計をわれみれば
零度を下る四十五度」
吹く風いかにさえぬらむ
よる雪いかにこぼるらむ
窓のがらすもあつから
裂けてこゑあり枕べに」
什耳喀の川の岸づたひ

波克暮それまでは
いづくの方にも里といふ
里こそ見えぬ家もまた
遠き山ぢをささらぎの
月もいつしかすぎゆきて
彌生のころになりたれど
春としもなしこのわたり
伯拉照夫琛そこすぎて
はや満州に入りたるに
見ゆるかぎりは竹ばやし
はじめて聞きつ虎のこゑ
愛渾墨爾根齊齊喀爾や
伯都納子はた吉林
寧古塔渾春の七城を

過ぎけり駒にまかせつゝ
かしこのまどぬこゝのうたげ
よるひる人にまねかれて
ひまだにもなし旅の日の
ふる里ちかくなるまゝに
四月は墨爾根齊齊喀爾に
五月は吉林寧古塔に
さえかへりぶく風さむみ
まだぬぎかへぬたびごろも

またの一

遠しと聞きしうまやぢも
みな盡きはて六月の

はじめつかたにつきにけり
浦鹽斯徳その浦に」
こゝにすまへるふる里の
わが國民ははやくより
おのがかへりをまちらけて
いとねもごろにむかへたり」
軒にかゝげし日のまるの
みはたは風にうちなびき
われをことほぐそのうたの
こゑものどかにきこゆなり」
かねてまうけし旅やかた
そこに集ひてくみかはし
とるさかづきにおのづから
浮びても見ゆそのなさけ」

今もわすれずわすられず
ウラルの山のそのあつさ
いつかわすれむわすられむ
シベリヤの野のその寒さ」
あつさを忘のぎ寒さをも
忘のぎ忘のぎて今こゝに
めぐりきにしはあはれあはれ
ゆめかうつゝかまぼろしか」
ためしもさかぬこの旅路
人はあやぶむこの旅路
うれしや障ることもなく
今はをへけりとげてけり」
こもみな思へば天皇の
大きめぐみによるなれば

はやくかへりてかへりごと
きこえまつらむ天皇し」
海邊をさして駒に騎り
けさ立ちくれば浪のほの
ほのかに見ゆるその國は
問はでも志るき秋津島」
あななつかしのふる里や
そのふる里の空高く
そびえて立てる富士の山
それの高嶺は見えざるか」
あはれその山われ常に
汝をわすれずまばらくも
あはれその山汝もまた
あそしとわれを待つならむ」

あななつかしのその山や
あなうるはしのその山や
われけふこゝを船出して
その山見むもあすあさて」
うれしといひて見さくれば
波にありある雲晴れて
空もひとつの大海原
朝日にあかし八重の志ほ」

學弟與謝野鐵幹に與ふる文

ささごころ、ちくられたる歌ども、心づきたるところどころに、筆くはへぬ。例の僻見、取捨は、御心にまかせまつるべくなむ。こたびの征清のみいくさは、歴史上、ためしめあらぬ盛舉なり。歌よむものは、大にうたはざるべからず。君のうたは、昔、

それにかゝはれるもの。歌よむものゝ務を、よく、つとめ給へりとやいはむ。されど、いづれも、戦地のさまを想像せるもの。靴をへだて、痒きところをかくが如き心ちせらるゝをいかにせむ。

君は、森鷗外君の、第二軍につきて、かの地にあるを知らむ。また、國分青崖君の、第一軍に従ひて、かの地にゆきしを知らむ。鷗外君は、たぐひまれなる文章家なり。必ずや、よき文を得て、かへらるゝならむ。青崖君は、たぐひまれなる詩人なり。こもまた、あもしろき詩を得て、歸らるゝならむ。さるに、いまだ、歌よむ人の、かの地にもあつしものあるをさかず。あのがうらみ、それいかにぞや。露蘆、その任にあたらむといへり。あのを、そをとこむ。かれの歌は、巧は巧なれど、纖弱にして、雄壯ならざればなり。時雨のや、ゆかむといへり。あのを、また、そをとこむ。かれの歌は、やゝ雄壯なれど、踈暴にして、優美ならざればなり。優美と雄壯とをかねたるは、君をあきて、また、他に、たれかあらむ。君は、猶、家にとどまり、想像の歌をのみよみて、満足しをるにや。

梨園の歌につたなきは、君の、よく知るところなり。かれ、第二軍の一兵卒として、

かの地にあり。このごろの書に、つたまにあたり驚るゝは誰ぞ故郷の母のふみをばふとろにして」といふ一首の歌あり。こを、君の歌にくらぶれば、或は、まさるところあらむか。こは、歌の巧拙にあらず、見聞するところ、實際にして、君の如き、想像の歌にあらざればなり。

とりての篝火、影さむきところに、母の寫眞をとり出でて、見る人はたれ。月になきゆく雁をさきて、故里の空をながむる人はたれ。妻のおくれる下着の上に、あかさあとに見ゆるは、縫ふをりに、そゝぎし涙にはあらずや。父よりおくれる文に、いさぎよき死をとげよとあるは、勝ちてはやく歸れと、いふにはあらずや。切られし創を、布にてくもり、敵陣に躍りいる勇將もあらむ。わが馬にのせて、大將をにがしやり、あとにとどまりて、戦ふ勇士もあらむ。負傷者のやみふせる露營のあたり、近くよりきて、なくなる狼の聲はいかに。ふさくる風もなまぐさき枯野原、たふれふす屍の上に、集り來る鳥のさまはいかに。枕頭の麵麩をひきゆく鼠、背囊の道明寺をあさる雀、いづれか、歌よむものゝ材料ならざらむ。ことに、砲烟、原野をこめ、その烟の、低くたなびきたる曉、かなたの松の梢、やうやうあらはるゝに、いつか、敵

は落ちゆきて、かのとりてに、朝日の御旗の見えそめたる、夕日影、西の山のはにかたぶき、今日の戦、はや、をはりをつぐるをりしも、廣き野原に、一隊の軍樂隊、すくみ出でて、君が代を奏したる、そを見れば、そを聞かば、おのづから、よき歌もうたはるゝならむ。夜ふけて聞ゆる笛の音は、いかなる人のすさびか。幾隊の軍人、夢うちままして、そをさかむ。そをさかたる時のころはいかに。かなしきか、たのしきか。人によりて、おなじからざらむ。その人々の心をうつすも、また、歌よむものゝつとめならずや。

梨園の書に、「いとくらす夜、斥候にいてたるに、ふかき山路にまよへり。敵地か、みかたの陣地か。道とふ家もあらざれば、心を決して、ひとり進みゆきぬ。燐寸をとりいでて、路をてらし見るに、靴のあとあり。こはいかに、おらざるらず、敵地にいりしよと思ひたる時の心細さ、筆紙のおよぶところにあらず。ふたゝび、燐寸をすりしに、一箇の釦の落ちたるを見出たり。拾ひあぐるに、あなうれし、その釦には、櫻花のゑるしあり。その時のおのがよろこび、そもそも、いかにぞや。實に、百萬の味方を得たるよりも、うれしくぞおぼえし。おのれは、その釦をなほもてり。

をりをり、とりいでて、愛釦の歌よまむと思へど、いまだよみえず。おのれにかはりて、よみてたまはずや」とあり。一箇の釦も、かの地にはありては、かゝり。おのれは、梨園の、かの地にあるを、うらやましと思へり。君は、いかに思ふらむ。

おのれら、淺香社をおこしてより、こゝに三年。歌につきては、いさゝか、研究せしところあり。君、また、社員の一入なり。おのれらにかはりて、出てたちてはいかに。君の家のこと、また、かしてゆきたらむ後のことどもは、よきにはからひてむ。あはれ、から山の月、もろこしが原の雪、必ずや、君の如き、歌人の渡來をまち居らむ。いかて、君。

わが文海

風吹きすさび、波たちあれ、いつ静まるべくも見えざるは、これ、現今のわが文海のありさまならずや。そのはじめ、支那の海邊より、風ふき起ると見えしが、それやまざるに、また、歐米わたりより、風ふき起れり。このおそろしき、このさわがし

き海上に、一隻の舟を浮べ、西に東に漂ひ居るは、これ、われわれ四千萬の同胞兄弟にあらずや。風は、いや吹きに吹きすすむ、波は、いやたちにたちあれ、その舟、今にも、覆らむとす。この時にあたり、われわれ同胞兄弟の抱ける意見はいかに。前程おぼつかなし、もとの湊へひきかへさむといふものあり。その議や着實、甚だ、よみすべきが如くなれど、や、迂遠のそしりを免れざらむか。波を蹴て、ひた進みに進まむといふものあり。その論や活潑、甚だ、よみすべきがごとくなれど、や、輕佻のさらひなかるべきか。われは、かしの浦へ、われは、ここの濱に、なにの泊へ、くれの岸にと、口々にあらそひ居るものあり。それもあしからず。されど、その寄せむといふところは、いづこ。かのもろこしの浦にはあらざるなきか。かの西の國の濱にはあらざるなきか。果して、さるところならむには、われわれ同胞兄弟の、口にすべし議にはあらざらむ。われは、船長を、支那人にゆだねむといふものあり。われは、そを、西洋人にたのまむといふものあり。こはそもいかに。器械こそあれ、石炭こそあれ、や、舟になれたる今日、なほ、船長を、外國人にまかすが如き、これまた、われわれ同胞兄弟の、なすべし論にはあらざらむ。

あはれ、同胞兄弟よ、もとの湊へひきかへさむといふが如き、迂遠の議をなすなかれ。よくもあしくも、こゝまで、進みきたれるにあらずや。など、いたづらに、ひきかへすが如き愚をなすべし。あはれ、同胞兄弟よ、波を蹴て、ひたすゝみに進まむといふが如き、輕佻の論をなすなかれ。過ぎ來りし舟路は、いかにありしぞ。風にくつがへらず、波におぼれず、こゝまで來れるだに、まこと、僥倖にあらずや。あはれ、同胞兄弟よ、舟路のながきにわびて、はじめの目的を達する能はず、もろこしの浦に、西の國の濱に、寄せむといふが如き、議をなすなかれ。われわれの行先は、敷島の和島根にあらずや。あはれ、同胞兄弟よ、いかに風は吹くとも、いかに波は荒るとも、船長を、外國人にたのまむといふが如き、論をなすなかれ。船長を、彼にたのみ、以て、わが目的を達したりとて、なにかせむ。かくの如きは、われわれ同胞の名譽ならざるのみならず、なかなか、不名譽のきはみならむ。舟は、うち碎けて、波底に沈まむも、何かあらむ。身は、おぼれて、魚腹に葬られむも、何かあらむ。さる無氣力なることは、こゝに論せむも、おのれは、いまいましてなむ。

一人、これを唱ふれば、一人、これを駁し、議論區々、かの船頭多きがため、舟を、山に

のほすといふ事は、これ、われわれ同胞兄弟の今日のありさまに、ふさはしきにはあらずや。遙に、前程を望めば、その距離の遠さのみならず、風吹き荒ぶのみならず、波打ちあるのみならず、幾多の暗礁ありて、わが舟を害せむとするにあらずや。さる危険なるこの舟路、いたづらに、議論をなして、日をちくるべき時にあらず。共に力を協せ、心を一にし、最も着實に、最も熱心に、楫を取り、櫓を推し、さて進まざるべからず。わが同胞兄弟は、この議に賛するや否。品田守信氏は、ものれと、憂を共にする人なり。このごろ、文海といふ雑誌を出さむとて、そのはじめに、一言を題せよと乞ふ。文海は、わが文章海のありさまを示し、漕ぎ行く船の指針を定めむといふにありとか。風波のあらしき今日、さはめて、必要の事業ならむ。こゝに、平生思へることを語るして、氏の志を賛し、あはせて、一日もはやく、わが舟の彼岸に達せむことを望む。

白薔薇

かやぶきの屋上の霜、朝日にとけて、軒の志づく、落ちそめぬ。翁は、庭におりたちて、こゝかしてに、置きならべある、無数の鉢の植木を見めぐり、見めぐり、遂に、暖室に入りぬ。赤に、白に、さまざまの薔薇の花は、冬の寒さも知らず、ささきにほへり。翁は、まづ、右の柵なる、一輪どきの白薔薇に、目を注ぎしが、やがて、ほしりゆき、この花よ、などかく、うるはしくさきたらむ。なま妻の、そだてまるらせし、かの姫君も、ましまさぬにと、いひて泣きぬ。翁は、暖室を出でて、力なくも、縁のもとへと、かへりきぬ。

門に、馬車のとまりたる音す。母君とおぼしき人に、手をひかれたる洋装の姫君一人、下りきて、翁を招き、薔薇の花のうるはしきがあらば、見せよといふ。翁は、二人を、かの暖室に導きしが、かの白薔薇の花は、忽ち、姫君の目につきぬ。こを買はむといふに、翁は、手をうちふり、そは、賣物に侍らずといふ。姫君は、いと不興げに、さらばとて、あたりの薔薇を見わたしが、氣にいりたるもなかりけむ、またやがて、出てゆきぬ。ほどもなく、また、門に、馬車のとまりたる音す。こたひは、女房三人ばかり、召しつれたる姫君の出できて、翁の案内のまにまに、暖室

に入りぬ。こも、目につきしは、かの花とみえて、翁に、なにかいはむとせしが、翁、かれは、賣物にあらずと、ことわりしこと、はじめのごとし。一人かへれば、また、一人来るなど、その日、午前のうちに、おなじほどの姫君、五人までも、訪ひきたりぬ。

ひるほどより、空、俄に、かきくもり、吹く風も、一まほ、寒くなれり。翁、内へも入らで、縁の柱に、よりかゝりて、なにか考へ居しが、忽ち膝をうち、それよ、今日^{けふ}は、一月の八日なり。歳暮のみまひにとて、わが姫君の來られしをり、來月八日には、一柳公爵夫人が、そのまな子、好美君のために、宴會を催さるゝよしにて、みづからの外に、五人ばかり、招待状をうけぬ。その状の末に、無禮なれど、好美が、心よすべきほどの、薔薇の花一輪、もてきてたべと、来るしあり。乳母の、この世にあらば、えらびてももらはましを、今はいかにせむ。爺よ、乳母にかはりて、よき花みたて、たべと、の給ひき。その五人とは、今日の五人の姫君のことか。大かたさならむ、必ず、さならむ。又、そのをりの姫君の御ことばに、他の人々は、侯伯子男、いづれも、身分たかき人々なり。みづからは、その人々と、同窓の友に

こそあれ、ちよぶべきにはあらず、よしなき事して、笑はれむよりは、寧ろ、その宴會には、出席せぬかたまさらむと、のたまひしかば、われは、そをよしとせめ、男女の縁は、身分によるものにはへらず。爺は、よき薔薇をもてり。朝夕、水やりて、その日までには、一輪、御とけまわらすべし。必ず、またせ給へやと、慰めまつりしが、猶、ものちもはしきさまにて、かへり行き給ひき。今ちもへは、それが、この世の御別なりしよ。やみつき給ひて、僅に、十日、遂に、かくれ給ひぬと、ひとりごととして、よくと泣きぬ。空、いよいよ、かき曇りて、風は、時雨となりしが、時雨は、また、雪となれり。

また、門に、馬車のとまりたる音す。翁、とくたちあがりて、そなたをみれば、今朝、最もはやく、訪ひ來し姫君なりけり。姫君は、靴のよごるゝもわすれて、翁のもとに、はしりより、今朝見し白薔薇の花、是非、賣りてよといふ。翁、折角の御のぞみなれど、かの花ばかりはといふ。さらば、わらはがもてる、この百金をとらせむ、いかで、ゆづりくれよといふ。たとひ、いく百金をたびても、かの花のみは、かなひ侍らずといふ。姫君、いかりの色をあらはし、ことばするどく、さらば、か

の花には、ぬしあるかといふ。ぬしありといふ。そのぬしとは誰ぞ。花江侯の姫君か、高田伯の姫君か、はた、相川子の姫君か、はたまた、佐伯男の姫君かといふ。翁は、すこし、うち笑みて、さる姫君にゆづるべくば、あなたにゆづり申すべし。かの花のぬしは、さる姫君にてはおはせずといふ。かく、問ひつめたる姫君は、金澤伯の令嬢にて、まくるをさらふ性なるが、そのぬしは、わが想像せる人ならずとさし、や、心ちりたるさまにて、出て行きぬ。翁は、見おくらせず。又、縁に腰うちかけしが、それよ、かの花、長く暖室におきて、姫君の形見にせむとも思ひたれど、また、いかなる人のたづねきて、もちゆかむも知れず。思へば、かの五人の姫君たちは、わが姫君のかたきなり。彼等の手に落ちむには、姫君の御恨や、いかならむ。はやく、切りとりて、もみくだかむと、鉄、手にして、暖室に入り行きしが、手ふるひて、さられず。むなしく、もとの縁に、もどりきぬ。さはいへ、あやふし。切りとりて、姫君の御墓に、手向くことにせむと、また、暖室に入り行きしが、手ふるひて、おなじくさられず。また、むなしく、もとの縁に、もどりきぬ。翁は、とつおひつ、考へ居しが、最後に、よし、うけ給ふか、うけ給はぬか、そは

わかねど、姫君にかはりて、公爵の若君に、たてまつらむ。それよ、それよと、足ばやに、又、暖室に入りゆきぬ。さて、鉢をおろして、切らむとせし一刹那、手くるひて、花片、くづれ落ちぬ。翁、一たびは、うち驚きしが、その落ち残れる一輪をもちて、笠もとりあへず、かけ出しぬ。

宴會は、はじまれり。招待したる客は、皆、揃へり。まなごの君は、母君の指圖によりて、將に、その會場に出てむとす。五人の客は、夢のこゝちして、わが贈れる薔薇の花の、あらはれむを待ち居しが、まづまづと、出て來れる彼が胸には、半、花片の落ちたる薔薇、にほへり。五人、互に、顔見あはせて、誰も、互に疑へり。宴、はてぬ。あはれ、雪の夜路を、よろこびて、歸りしは、かの姫君たちのうちにはあらで、かの翁なりしも、あやしうてなむ。

萩の家

おのが庭に、一もとの萩あり。秋ごとに、その色、いとふかく、枝などのまげれる

さま、いみじううるはし。朝にあきて、そをながめ、夕にたち出でて、それにうち對ひたる心ち、たとふべきものなし。おのれ、家の名を、萩の家とよべるも、この萩のためのみ。他にまた、なにのころかあらむ。一とせ、飯田町に住みけるに、枝、いたくおひまげりて、花も、やゝほころびそめたり。明日明後日は、さまのさかりならむといひあへりしに、俄に、野分の風、ふきたちぬ。雨さへ、ふりそはりぬ。おのれは、妹をかたらひ、共に庭におりたちて、そを防ぎぬ。「竹もてこ、その戸はづせ」など、うちとよめきたるその聲、今なほ、耳にあり。その後、ほどなく、妹は、世になき人となれり。

さだめなき旅のならひ、家をうつすこと、一とせに、二たび三たびは、常のことなり。佐土原町、拂方町、大門町など、幾度かうつりたり。されど、その萩は、はなたず。今の掃除町の庭にあるも、やがてその萩なり。その萩は、秋ごとに、花さけり。その花、その色は、舊時にかはることなし。たゞ、その萩にうちむかふものがころは、舊時にくらぶれば、いたくことなれり。そは、妹の、この世にありしほどは、萩の花は、おのが心をよろこばせしに、妹のうせにし後は、おのが心をかなしま

しむるが如し。さまの萩と今の萩と、かはりあるか。いかでか、その萩に、かはりあらむ。さては、よろこばしといひ、悲しといふは、皆、わが心からならむ。

明治二十四年九月三十日、午前九時ごろより、そのけしき、たゞならずと思ひしに、雨ふり出で、風ふききたりて、その勢、おどろおどろしく、ひるつかたより、いよ、はげしうなりぬ。おのれ、高等中學校にありしが、萩のこと、心にかゝらぬに、はあらねど、授業ひまなく、午後二時ばかり、家に歸りぬ。さて、庭を見しに、垣たふれ、壁くづれ、例の萩など、目もあてられず。あはれ、妹の世にありしころは、風も防ぎ、雨もふせぎてありしに、けふ、かく、はかなくなしたるは、げに、くちをしきかぎりなりとて、その夜は、ねもやらす。さはいへ、風に吹きをられたりとて、その萩の幾部分は、必ず、うるはしうさくならむ。また、ことしの秋は、さかすとも、またこむ秋は、必ず咲くならむ。たゞかなしきは、かのかへらぬ人の上こそ。次の日、この文をかきてありしに、例の下枝のあたり、朝露こぼれたり。萩もまた、心なきにはあらざらむ。

この正月

年も、はや、暮れむとす。病院の寢臺に、うち伏して、つくづく、過去の正月を追想するに、大かた、皆、忘れにたれど、幼時の事どものみは、よく記憶せり。幼時は、思想、單純なり。故に、一たび、頭腦にきざみたることは、生涯、忘ること能はざるにやあらむ。ある年の正月、父君より賜はれる紙鳶は、牛若丸と辨慶との繪なりしよ。ある正月、母君のえさせ給へる雙六は、振出が、曾我兄弟にて、あがり、神功皇后と武内宿禰との繪なりしよ。この紙鳶、この雙六は、最も、わが氣にいりのものと見えて、牛若丸、辨慶の面影は、さらなり、雙六の繪も、大かた、記憶せり。その紙鳶をあげたる日は、風つよかりしが、隣の、栗の木にひきかけしこと、又、その雙六にて、とりえたる菓子は、いかなる菓子なりしか、その數は、いくつなりしか、一々、記憶するも、をかしや。七歳のころとちぼえたり。かさぞめに、南山壽といふ三字をかきて、父君より、上和下睦といふ、うるはしき墨を賜はりたることあり。その日、父君の御ゆるしをえて、兄君とともに、躑躅岡なる天滿宮に參詣

せしが、そのをりの、わが刀脇差よ、ふちがしらは、唐獅子と、牡丹とを彫刻せるもの、鐔は、つやめきたる黒き地金に、七曜の星をちりばめたるもの、下緒は、紫色にて、平打なりしことまで、記憶せり。そのをり、母君の着せ給へる着物の紋も、記憶すれば、袴の色も、記憶せり。供せるは、小姓の鐵之助、忠兵衛の二人と、仲間の彌助となり。石のさざはしをのぼるをりは、彌助に負はれ、繪馬堂をめぐるをりは、忠兵衛に、手をひかれたることも、記憶せり。家に歸りて、着物は、着かへたれど、刀脇差は、はなたず。その日一日、さしをりしことも記憶せり。そのころの、われらの心の、いかに無邪氣なりしよ。思ひ出づるごとに、今一たび、さる幼時に、たちかへらまほしうちぼゆるや。わが幼時は、殊に、愉快なりしなり。思ひ出づる事は、悉く、愉快なりしことにて、苦痛といふほどの苦痛は、更に、記憶せざるなり。その當時、わが家の勢はいかにといふに、さほめて、零落せる時なり。伊達家の門閥にて、さらびやかなる生活をなしをりたるものが、維新の劇變にあひ、家祿はめしあげられ、家格はちとされ、なにも、たよるところなきに、家は大なり、家來はちほし、この程の、わが家の慘狀、父君母君の苦心、あとにて聞き知れり。さる

家運衰退のをりなるにか、はらず、苦痛といふほどの苦痛はあぼえず。かく、愉快なる事のみ、記憶し居るは、父君母君のあたゝかさなさけならずして、そもそものにぞや。ことに、われらの、最も、よく、記憶して、忘るゝことあたはざるは、このほどの、ある正月、父君の病床におはせし時のことなり。まへの年の十一月ごろより、やみつき給ひて、十二月の末つかたには、よほど、重くならせ給ひたれば、母君は、松かさりもあろそかにせよ、屠蘇もやめぬ、餅もすくなくつけなど、の給へり。そを聞き居たる、われらの失望はいかに。兄弟、互に、顔見あはせて、泣きぬべくあぼえたり。さはいへ、元日には、父君の伏し給へる奥の間にて、雑煮などいはひたるが、そのをりの、父君の御顔よ、瘦せに瘦せ給ひて、髯なども、あそろしきまで、のびさせ給へり。母君にたすけられて、まひて、起きあがらせ給ひて、箸をとりはとられしが、一口も、めし給はて、そのまゝ、また、枕につかせ給へり。その日、廊下にて、兄君と、獨樂をまはし居たるに、母君、いでき給ひて、父君の御病氣なるに、心なきわざと、とめさせ給ひぬ。下の座敷にて、姉君と、羽子つき居たるに、母君、また、出て來給ひて、とめさせ給ひぬ。夜に入りて、雙六、歌留

多などのこと、まきりに、思ひ出たれど、母君のゆるさせ給はねば、とりいださ

ず。二日の朝、父君は、われらをよび給へり。何事ぞと、行き見れば、わが病氣は、はや、よくなれり。今日よりは、獨樂もまはせ、羽子もつけ、雙六もせよ、歌留多もとれ。かけ物は、われとらせむとて、密柑あまたを、とり出ださせ給へり。そのをりの、われらの愉快はいかに。過去の正月に、この時ほどの愉快は、なかりしのみならず、未來の正月にも、また、この時ほどの愉快は、なからむ。われは、十五歳のをり、東京にいてたるが、その後の正月は、苦痛のことのみ。人生の愉快は、十歳前後までなり。それ過ぎては、愉快といふほどの愉快は、なからむ。されば、いとけなき時に、十分なる慈愛を垂れなば、その子は、生涯、そのなさを肝に銘じて、忘るゝことなかるべきなり、われも、子を持てり。身たふとき人のことは、知らず。家富める人のことは、知らず。われわれは、われわれの分あり。平生はとにかく、せめて、正月ばかりも、彼等に、愉快をあたへむと思へり。かくて、この四五年は、病氣のため、あたゝかき地に轉りて、正月を迎へたるが、いつも、彼等を伴ひたり。一昨々年は、小田原に、一昨年は、逗子に、昨年は、修善寺に、本

年は、興津に伴ひて、正月を迎へさせたり。雙六もすれば、歌留多もとれり。紙鷲もあげたれば、羽子もつきたり。わが幼時の正月の事より考ふれば、彼等も、その間にありて、一二の記憶するものあらむ。過去の正月は、彼等に對し、われは、わが心に、遺憾を覺えず。たゞ、この正月よ、いかにして、彼等に、愉快を與ふべきか。今宵あたり、彼等の母は、わが母君の、の給ひしが如く、父君、病院におはすれば、松飾も疎かにせむ、屠蘇もやめむ、餅も、少なく搗かむなど、いひ居るならむ。彼等は、それを聞きて、わが失望せしが如く、必ずや、失望し居るならむ。わが父君は、よく、われらの失望を、愉快の地にかへさせ給へり。われは、いかにしてか、彼等の失望を慰むべき。おもへば、この正月は、わが心一つにて、彼等が、生涯、忘ること能はざる苦痛ともなれば、愉快ともならむ。はや餘日もなし。あはれ、いかにせむ。

楠公の歌

二四八

櫻井の訣別

二四九

青葉まげれる櫻井の
里のわたりの夕まぐれ
木の下かげに駒とめて
世の行末をつくづくと
まのぶ鎧の袖の上に
ちるは涙かはた露か
正成なみだをうち拂ひ
わが子正行呼びよせて
父は兵庫にもむかひ
彼方の浦にて討死せむ
汝はこゝまで來れども

とくとく歸れ故里へ」
父上いかにのたまふも
見すてまつりてわれ一人
いかて歸らむ歸られむ
この正行は年こそは
未だ若けれもろともに
御供仕へむ死出の旅」
汝をこゝより歸さむは
わが私のためならず
おのれ討死なさむには
世は尊氏のまゝならむ
早く生ひ立ち大君に
仕へまつれよ國のため」
この一刀は去にし年

君の賜ひしものなるぞ
この世の別のかたみにと
汝にこれを贈りてむ
ゆけよ正行ふる里へ
老いたる母の待ちまさむ」
ともに見送り見反りて
別れをしむ折からに
又もふりくる五月雨の
空に聞ゆるほとゞぎす
誰かあはれと聞かざらむ
あはれ血になくその聲を」

敵軍襲來

遠く沖べを見渡せば
浮べる舟のそのかずは
幾千萬とも老ら波の
此方をさして寄せて來ぬ
陸はいかにとながむれば
味方は早くも破られて
須磨と明石の浦づたひ
敵の旗のみうちなびく
吹く松風かゑら波か
よせくるなみか松風か
響き響きて開ゆなり
つゞみのおとに関のこゑ

湊川の奮戦

いかに正季われわれの
命すつべき時は來ぬ
死す時死なでながらへば
死するに勝る恥あらむ
太刀のをれなむそれまで
敵のことごとかたへより
斬りてすてなむ屠りてむ
進め進めといひひて
かけいるさまの勇ましや
右より敵のよせくるは
左のかたへと薙ぎ拂ひ
左の方よりよせくるは
右の方へとなぎ拂ふ

前よりよするその敵も
後よりするその敵も
見ては遁さじのがさじと
奮ひたゝかふ右ひだり
とびくる矢数は雨あられ
君の御ためと昨日今日
數多の敵に當りしが
時いたらぬをいかにせむ
心ばかりははやれども
刀はをれぬ矢はつきぬ
馬もたふれぬつはものも
かしこの家にたどりゆき
共にはらをばきりなむと
刀を杖にたちあがる

身には數多のいたやぐし
戸をおしあけて内に入り
共によるひの紐とけば
緋をどしならぬくれなるの
血まほまたゝる小手の上
こゝろ残りはあらずやと
兄のことばにおとうとは
これみなかねての覺悟なり
何かなげかむ今さらには
さはいへくやしねがはくは
七度この世に生れ來て
にくき敵をばほろぼさむ
さなりさなりとうなづきて
水泡ときえしはらからの

こゝろも清きみなと川」

鬼界島

鬼界が島と、名をさくだにあそろしや。島は、薩摩瀉をへだつる三十餘里、大島の東にあり。源平盛衰記に、「この島々へは、おぼろけならでは、人の通ふこともなし。島にも、人稀なり。おのづから、ある者も、この土の人には似ず。身には、毛長く生ひ、色くろくして、牛のごとし。いふ言の葉も、きゝまらず。男は、烏帽子もきず、女は、髪もけづらず、木の皮を剝きて、さねかづらにしたり。ひとへに、鬼のごとし。眼に遮るものは、燃えあがる火の色。耳に満つるものは、鳴りくだる雷の音。肝心きんこころも、さゆるばかりなれば、一日片時、堪へてあるべき心地せず。賤が山田もうたざれば、米穀の類も、さらになく、園の桑葉も取らざれば、絹布の服も稀なり。昔は、鬼の住みければ、鬼界の島とも名づけたり」とあり。そのさま、おもひやるべし。島の中央に、山嶽わだかまり、西のかたに、いと曠漠たる空原あり。土地瘠

せて、目をなぐさむる草木もなく、たゞ、ところどころ、名もまらぬ灌木のおひいつるあるのみ。そのさびしさ、なに、かたとへむ。ころは、秋のはじめつかたなり。さらぬだに、かわくことなき流人のたもと、いかに、露けからむ。

そもそも、鬼界が島は、ふるくよりの配所にして、こゝに住ひするものは、その罪も、さはめておもき人なり。その人々は、いづこより、食を給せらるゝにしもあらざれば、磯べにいてて、魚をつり、野末にゆきて、鳥獸をとらへ、その肉にて、からくも、世をおくるなりけり。

磯山かげに、一軒の茅屋あり。こも、流人の住家とおぼしく、四十四五の男子が、その妻、および、幼女と、共に、すむなりけり。山嶽と、空原とにへだてられ、世間と、交通することなきは、さらなり、松ふく風、いそうつ波の聲ならでは、たえて、あとづるゝものもなし。そも、この人々は、いづこの人、また、いかなる人、また、いかなる罪にて、流されたる人にかあらむ。島人は、常に、彌兵衛殿とのみよべり。こは、大かた假の名にてもやあらむ。妻を、千鳥、少女を、まのぶといふ。ひるは、獵にとて、夫の、野べにいてゆけば、妻は、少女とともに、海邊にものして、貝を

拾ひ、夜は、まのぶに、読み書きを教ふるなど、悲しき中よろこびならむ。まのぶは、父母のかたはらにありて、常に、書をよむをたのしみとせり。父母も、その聲をきくを、たのしみとせり。をしへつ、をしへられつするほどに、秋の長夜も、ふけゆくべし。まのぶは、父のさびしきいましめと、母のやさしきをしへとをうけて、生長せり。そのころのたゞしく、かつ、まめまめしきなど、また、いふばかりなし。

はなれ小島なれど、秋は秋なり。夕露まげき庭のあたり、萩、尾花など、さきみだれたり。まのぶは、父母をなぐさめむとならむ、ちりたちて、そを手をりさぬ。そを見て、ちり母は、たのしと、おもひしならむか、はた、かなしと、おもひしならむか。たのしとは、おもはざりしなるべし。かゝるはかなき草木すら、時くれば、花もさきぬ。かなしきは、わが子なり、はかなきは、まのぶなり。かゝるところにすてられて、いつかは、花さくをりのあらむなど、おもひなげさしなるべし。

ある日の夕まぐれ、彌兵衛は、ものおもはしげなるさまにて、庭のあたりながめ居たり。いかに、たへがたかりけむ。かたはらなるまのぶを抱きよせ、さて、妻に對

ひて、千鳥よ、この子を伴ひ去れ。わが妻よ、この子を伴ひゆけ。この子の運命と、いましの運命とは、われこそつくりたれ。あはれ、いかなれは、われと共に、かゝる悲しきところにはきたりしぞ。はじめより、われを見すて、こゝにきたらざりせば、はじめより、あのれとうきを共にせむと、乞はざりせば、予は、かゝる配所にありつゝも、せめては、汝等母子の、都にありて、他人の尊敬を、うくるをさし、こゝろをなぐさむることも、ありつらむをといふ。妻は、こをきいて、いかに、かなしかりけむ。たゞ、涙をもて、こたへしのみ。

千鳥は、年のころ、三十餘なり。かたち、ことば、いとやさし。千鳥のころには、夫に伴ひて、共に、うくべきうきめあるはまれども、夫にわかれて、ひとり、うくべきたのしみは知らざるなり。さては、高き位置をうしなひたるも、名譽を傷けられたるも、都をおひいだされしも、かゝる小島にながされしも、更に、悲しとは思はざるなり。あらず、わが夫の、悲歎のさまだに、みることもなくば、かゝる配所にあるも、なかなかに、たのしきことゝおもひしなり。げにも、千鳥のころには、夫をおもふの外、他に、おもふおもひは、なかりしなり。

少女志のぶは、三歳のころより、すみなれたることなれば、この島ならでは、すみよき國あるを知らざるなり。志のぶは、つねに、磯邊にあさり、野末にあそび、餘念もなくてのみ、くらししかば、その身のすこやかなるは、さらなり。みめかたち、いとうるはしく、日をふるまゝに、月をかさぬるまゝに、その愛敬こぼるゝばかりなり。されど、そのやさしき顔かたちも、たゞ、兩親のこゝろをなぐさむるのみ。あはれ、たれか、また、かゝるところに、かゝる少女のありとは知らむ。たとへば、野末の花の、みる人もなさに、さきそめたるが如し。

人の愛情は、せまきほど、ふかきものなりとか。志のぶは、兩親のほかには、知るものとはなく、兩親のほかには、愛すべき人とてもあらざれば、兩親をもて、おのが愛情の眞の對象とは思ひをるなり。まこと、その兩親は、志のぶの友なり、志のぶの師なり。兩親の、教へたることの外には、何事も、まらざるなり。才智も、學識も、皆、兩親のたまものなり。もし、兩親のなかりせば、何事もなしえず、また、何事も、知らざりしならむ。さはいへ、としをかさぬるまゝに、おのづから、深き考へもいできたりしなり。人まれず、母の、なげきかなしめるままと、父の、たの

しまざるままとを、みるにつけて、いたく、いぶかしうおもひ居たり。をりをりは、兩親にむかひて、事の仔細を、尋ねることありしも、兩親は、たゞ、故郷をこふるなりと、こたふるのみ。その故郷は、いつて。その身分は、いかに。たえて、つげもやらざるは、つぐるにもまさる、親の慈悲なるべし。

志のぶは、一たび、兩親の、なげき悲しむさまを見てしより、こゝろもこゝろならず。今まで、餘念なく、あそびたはむれたのしみも、いつか、あとなくささるらぬ。少女は、心のうちに、兩親は、故郷をのみ志のぶたまへり。その故郷は、いつこならむ。故郷にかへりたまはては、この世のたのしみは、ましまさぬなり。その故郷は、わかねど、その故郷は、教へたまはねど、いかで、かへしまつらむすべは、あらざるものかと、たゞ、一すぢに、それのみ、心にかけ居たり。

志のぶは、かれこれと、おもひまぬび、ある夜、父にむかひて、いひけるは、父上よ、わらはは、御身に、たづねまゐらせたまことあり。いひいでても、くるしからずやといふに、父は見もかへらず。ふたゝびとひけるに、いとかなしげなる顔して、少女をながめたり。くるしからずといふことならむと、おもひしかば、志のぶは、父

上よ、父上の故郷を、たづねまゐらするに、いつも、こたへたまはず。いかなることにてかはべるといふ。父は、告げたりとて、そのかひなからむによりてぞかしといふ。老のぶは、まばし、考へ居たりしが、ことばをつぎて、父上よ、よくきこしめせ。老のぶも、今は、十三の秋をかさねたり。ものゝことわりも知りえたり。父母のめぐみあつきもまりえたり。身をころしても、そのみめぐみに、報いまつらむとおもへり。父母の艱苦を、救ひまつらむとおもへり。それがために、こゝろをなやましは、いくたびぞ。それがために、袖ほりしは、いくたびぞ。さるを、告げたりとて、かひなしとは、いかに。あはれ、この身を、あはれとおぼしめさむには、故郷の、いづこなるかを、あかしたまへ。御身の不幸をきたしたる、その原因を知らしめたまへやといふ。父は、たゞ、泣きに泣き居たり。母は、見かねたりけむ、夫のかたはらによりきて、わが夫よ、何故に、その經歷を、彼にあかしたまはざるか。彼は、幼少なれば、かたるも益なしとおぼしめしてにや。はた、既往の運命を知らしめなば、なかなかに、彼のこゝろをいためむとてか。いかにといふ。父は、なほ、泣きに泣き居たり。まばしありて、老のぶにむかひ、おのれ、さきに、汝の

さかむと、ほりすることを、ことごとく告げむとは、おもひたれどといひさして、また、泣きに泣く。老のぶも、たへがたく、父と、母との膝に、ひたと、よりそひて、おなじく、泣きに泣く。をりしも、月かげさそわたり、みそらゆゑの聲など、いとあはれにきこゆ。

老のぶは、父母のかなしむをおそれ、その後は、何事もいひいせず。いひいでされど、その心は、かはらざりしなり。あらず、いよいよ、かたくなりしなり。いかにもして、父母の、ふるさと、父母の、もとの身分を知らむと、おもひわたれり。一日、ふと、こゝろづきしことあり。そは、筐中なる、一卷の系圖なり。必ず、先祖の御名の、老るしあるならむ。祖父、祖母の御名も、見ゆるならむと、父母のなき時をうかどひ、ひそかに、そをとりに出しぬ。さて、後のかたなる野原に老のぶ出て、ひとり拜みて、そをひらきぬ。あなたふと、そのはじめにみえたるは、清和天皇なり。なほ、まさつ、ひらきみるに、いづれも、世々の門閥にて、あるは、左右大臣、あるは、大納言の人々にておはすなり。さて、祖父のきみは、源さくらとて、大納言までのほりたまへる御方なり。わが父君は、やがて、その御子なり。くりかへし

くりかへし、よみては、喜び、喜びては、泣き居たり。少女は、父母をすくはむとするころ、いよいよ、かたくなりぬ。少女は、ひとり、ころにもふやう、わがころざしを、はたさむとせむには、両親と、別れざるを得じ。別れて後は、幾多のからさうきめにあふことならむ。わが受くるうきめは、もとより、覺悟せり。されど、慈悲ふかき父母の、わがうきめを見たまはむには、聞きたまはむには、われにもまして、悲哀の情を發し給ふらむ。さては、わが願も、わがたのみも、きゝ入れたまはざるべし。都にかへりて、故郷にかへりたまひて、受けたまふべき幸福も、今の別離のくるしみを、償ふには足らずと、おぼしたまふらむ。あはれ、いかにかせむと、おもはず聲をいだして、なき伏しぬ。父は、木かげにありて、まばし、きゝ居たりしが、あわたしく、走り出て、まのぶよ、悲むはなに事ぞ。悲むべきことのあらば、なに故にか、父に告げざるといふ。まのぶは、かくすこともかなはねば、ころをさだめて、まのぶは、長くは、かゝる島にありとは思はず。いかにもして、都とやらむへ、かへりたく侍るなり。この願をゆるしたまへと、涙とともた、いひいでぬ。子を知るは、親に如くはなし。父は、まのぶのころざしの奪ふ

へからざるを知れり。また、その決心のありしも、はやくより知れり。たゞ、妻のきかむことをおそれ、妻のきいて、おどろき悲まむことをおそれ、昨日までも、今日までも、今までも、なにともしはざりしなり。まのぶも、父母にむかひて、語らむと思ひしも、たびたびなり。されど、いつも、いひかねたるなり。ことに、母には、そのけしきだに、知らせざりしなり。親しき母に、かくまで、かくしたりしは、母の許さぬを知り居ればなり。なかなか、おのがころざしの、さはりにもやならむと思へばなり。

父は、まのぶの請に對し、なに事も答へず。答ふるは、答へざるにひとしと、思ひたればなり。かつ、まのぶには、母のあるあり。母、即ち、妻のころのほども、きかざるべからず。まかば、いかゞ答へむ。とても、ゆるすことはあらざるべし。まのぶも、母にはいひかねたり。父の口より、なにとて、こをかたるを得じ。父の苦心、いかにあらず。

まのぶは、父にむかひて、その返事をうながしぬ。父は、なに事もいはて、たゞ、うつぶさ居たり。をりから、母もたづねさぬ。父のおどろき、いかならむ。まのぶ

のおどろき、また、いかならむ。父と、子と、心をあはせたるが如く、ともに、かのはなしを中止せり。母は、さることと思はず。たゞ、大かたのはなしをはじめたり。それをさく夫、それをさく子、いかに、あはれにありしならむ。

二日ばかりへて、大風ふきぬ。海いたくあれぬ。そのあくるあした、湊のあたりに、一の大船、ふきよせられてありけり。彌兵衛は、はやくも、難船なりと知りぬ。都わたりの音信もがな、知れる人もがなとて出て見ぬ。さて、のれる人々にたづねたるに、難波の浦より船出して、異國にわたらむとて、きたりしが、玄海洋にて、風とともに、吹きやられ、うちながされ、からくも、この島にたゞよひつきたるなりといふ。うちつみたる荷物も、大かたは、海になげすてぬ。また残りしものも、潮にひたされぬ。今は、すべきやうもなし。さては、二日三日、こゝにて、船の損處を繕ひ、もとの浦にかへらむなどつぶやく。それをきいて、まのぶは、よきをりなり。この船にのりて、かしてへわたらむと、おもひさだめぬ。

まのぶは、わが家にかへりぬ。両親の前に手をつきて、あはれ父君、あはれ母君、まごじめせ、わがいふことを。まのぶは、いかにもして、御身たちをもとの身に、

もとの幸福に、もとの郷國に、かへしまつらむとおもへり。こは、昨日今日、おもひつきたるにあらず。多年ののぞみなり。そののぞみを、實行すべき時機も、はや近づきぬ。わがねがふまにまに、ゆるさせたまへといふ。父は、例のこと、おもへば、おどろかず。母は、あまりのことに、なにごともしらへず。まのぶは、ことばをつきて、父母には、わが願を、とどめたまふ御ころにや。この世の中に、わがもとめむとするのぞみより、更に、大なる幸福あらむには、とどめ給へ。まのぶは、それに従ひまつらむ。もし、さる幸福もなからむには、わが願ふまにまに、ゆるさせたまへといふ。父は、なに事もいひ出てざりしが、母は、ことばをあらうげて、父上は、いかに仰せたまふとも、この母は、ゆるしがたし。そのねがひを、さういふるゝ能はずといふ。されど、まのぶは、両親の御ために、生命をなげうたむとおもへり。今日まで、いきながらへたるも、その考あればなり。後日にいたり、救ひまつらむと、おもへばなり。もし、さるのぞみのなからむには、なにとてか、今日までながらへはへらむ。もし、それをゆるし給はずば、今後、いきながらへても、なにしたのしみあらむ。ながらへて、両親の御なげきをみむよりは、むしろ、死してと、

いはむとせしを、父は、あしとらめ、やめよ、老のぶ。いかで、おもひとまれ。この父も、また、汝のねがひをゆるす能はずといふ。母は、力をえて、父うへさへも、さのたまふにあらずや。まいて、母がこゝろのうちには、いかゞあらむ。推してよといふ。老のぶは、いよいよ、あらがひ求めて、更に、おもひとまるけしきも、あらざりけり。父は、そのこゝろざしの、なみなみならぬを、知りしかば、妻にむかひて、千鳥よ、老のぶの、かくまで、おもひこみたるこゝろざしを、おさへ得らるべきか。また、かゝる、かなしき無人の島に、この世ををはれと、命ずるをうべきかといふ。千鳥は、妻たる感情を、わすれたるにはあらず。また、夫のことばに、そむかむとするにもあらず。たゞ、母たる感情の、はげしさに、子を愛する念の、せちなるに、なほも、夫に對ひて、いふやう、いかにのたまふとも、妻は、これをゆるさず。妻は、つとめて、そのねがひを、拒まむと思ふなり。妻は、わが子の生命を、危難に任するを、欲せざるなり。御身は、老のぶが、ひとり、萬里の波路を、凌ぎゆくを、老のぶに見よとのたまふか。はたまた、かれが、凍えて死し、飢えて、歿せむ時あるにも、なほ、忍びて聞けとのたまふかと、語り終りし時は、

はや、涙つきて、一滴も落ちざりけり。彌兵衛は、そを見るに忍びず。わが子よ、老のぶよ、母のゆるしたまはざるうへは、汝の決心も、益なかるべし。おもひとまれかしといふ。老のぶは、父のこゝろを察して、母上のゆるしたまはずば、おもひとまりはへらむ。なにどてか、御身の仰に、そむさまつるべしといふ。父は、老のぶの手をとりて、寢室へいらぬ。母は、佛間にこもりぬ。夜すがらさこゆる讀經の聲、いと悲し。

夜もふけぬ。父もねぶりぬ。母もねぶりしならむ、讀經の聲も、さこそえずなりぬ。老のぶは、ひそかに、縁の方へ出てぬ。さて、立ちかへりて、ねいりたる父の顔を見つめ、思はずとぼす「まづくを、父は知らざらむ。まこと、知らざるにはあらざらむ。知りつゝも、知らざるさましたるならむ。老のぶは、手を合せ、まばしの不孝をゆるさせ給へと、いふも、口のうちなり。かくて、また、縁に出てぬ。庭にも立ちぬ。まばし、立ちとまりて、何事ならむ、考へ居たりしが、また、縁にのぼりぬ。こたびは、母の寢室の方へ行きぬ。父は、老のぶの決心を知れり。されど、母は知らず。老のぶも、母には知らせて、出て立たむの心なりしが、竟に、一生のわか

れとならむも、はかられねば、せめては、寝顔なりとも、一目見むとて、立ちもどりしなり。ねぶりをおどろかさじと、静に、戸をひらく。佛壇の燈火、影くらし。母上と、よばむとせしが、わが心を、わが心にていましめ、そのまゝ、立ち出でしは、いかに、雄々しき心ならむ。

露ふかき野邊の草むら、ふみわけて、志のぶは、たゞ、いそぎにいそぐ。家をはなれしこと、一町がほどとなりぬ。はるか後の方にて、人のよぶ聲す。こゝろのまよひならむと、かへりみもせていそぎしに、その聲、やゝ近くなりぬ。聞けば、まがふ方なき父の聲なりけり。志のぶは、うちちどろきたれど、さすがに嬉しかりけむ。こゝろと答ふ。父は、とぶか如く、はしりよりて、志のぶを抱きしが、涙のほかは、ことばもなし。志のぶ、父上、御身は、何故に、來り給ひしぞ。父、汝を見むために、今一たび、汝を見むために。志のぶよ、汝は、いよいよ、思をさだめつるか。この父は、この期にいたり、なにかとどめむ。たゞ、船のうちに、知る人ありやと問ふ。志のぶ、志のぶ、船長なるやさしき老人に、たのみちきたりと答ふ。父は、こゝろに、そを喜びたり。されど、今、わかるゝにあたりては、なかなか、心つ

らき老人と思ひしならむ、父は、更に。志のぶに對ひ、志のぶよ、父は、なに事もいはじ。たゞ、その身を、いたはりて、船中にも、かの地にても、やみわづらふことなかれといふ。志のぶも、父上こそ、御身を大切に。ことに、母上には、よろしくとりなしてといふ。父は、涙をささへつゝ、ゆめ、こゝろになかけそ、とはいへ、母が起き出でたらむ時、予は、なにか、それに告げむ。志のぶはと問はむには、また、なにか、これに答へむ。彼は、磯邊に出て、野末に出でて、くまなく、汝をもとむるならむ。予もまた、呼べどこたへぬ汝の名をよびつゝ、共に、汝をもとむるならむ。志のぶよ、父がこゝろを、推してよといふ。志のぶは、えたへず、父の膝にとりすがりて、なきになく。

時刻せまりたりとて、船長より、よびにおこせつ。父も行く。志のぶは、船にのりぬ。父は、岸にて泣く。をりしも、母、たづねさぬ。夫を見るより、あわたいしき聲にて、志のぶはと問ふ。父は、たゞ、船を指す。母は、おどろき走りて、波にいたらむとす。父は、やらじとこゝろむ。妻さかず、志のぶ行くことなかれとさけぶ。船出づ。志のぶよ、志のぶよと、母もさけべは、父もさけぶ。志のぶも、聲のかぎり

船よりよぶ。船、やゝ遠ざかりぬ。聲も、さこそすなりぬ。高さところのぼりて、うちまねけば、船にも、かすかて、うちまねく。船の見ゆるかぎりは、見おくりぬ。岸の見ゆるかぎりは、かへりみしならむ。

波路はるかに、漕ぎ出てぬ。鬼界が島も、はや見えすなりぬ。されど、なほ、まのぶの心は、父母のあたりを、はなれずあらむ。まのぶは、心のうちに、母上は、かなしみのあまり、御病を、ひきおこさせたまふことは、なからむか。父上にも、世を去らせ給ふことは、なからむか。ゆゑしき波路をうちわたり、遠き都をさして急ぐは、そもたがためぞや。たゞ、父母のためのみ。その父母の、この世におはせずなりなば、またいかにかせむ。思へば、この船出は、なかなか、あしかりしならむ。いな、さにあらず。たとひ、この身、父母のもとにあらむも、かの島にては、み心慰めむ時はあらざるべし。たゞ、いそぎ、都へのぼり、御門にきこえあげて、父母が罪のみ宥したまはらむことを、わが身のつとめなれ。さなり、あらずなど、思ひ出でては、思ひやみ、やみては、また思ふ。そのころ、いかにかなしからむ。日も、やゝ、波間に沈みぬ。もの思はしき夕となりぬ。まのぶは、をゝしきをとめなり。

されど、都にのぼらむとする心は、故郷にかへらむとするころには、うち勝つてと能はざりしなり。船は、東をさしていそぐ。心は、西にのみなり行く。夜になりぬ。船底にうちふして、こしかた、行末のことなど、思ひやるにも、いよいよ、戀しきは、故郷となりけり。夜ふくるまゝに、風ふき、雨ふり、雷鳴り、波さわぎ、船の動揺いはむかたなし、はや、帆を巻け、柱折れつなどたちさけぶ舟人の聲々、さくもあそろし。夜ひと夜、風ふきやまず、雨ふりやまず。船の行くべきかたもあほえざりしに、もと來し島へうちながされたり。こは、鬼界が島にあらざるかといふ聲きいて、まのぶは、なに、鬼界が島とよ。そは、わが故郷の、あの鬼界が島なるよなど問ふも、いとあわたし。くるしき身をも、うちわすれ、にはかに、あたりを見るに、まこと、故郷なりけり。こは、そもいかにと、飛ぶが如く、岸にうつりぬ。かねて、通ひなれたる磯づたひ、それすぐれば、野山の下道、それすぐれば、野邊の細道、それ過ぐれば、やがて、わが家なりけり。はるかに、彼方を眺むれば、門に、ものおもはしきままして、父は立てり。夜への嵐に、わが子の船は、いかにと、案じ居るなるべし。さて、ちかよりて、父上と呼べば、父は、とみにもこたへず。

たゞ、こなたをうちまもり居たり。ふたゝび、父上と呼ばば、そなたは、わが子にはあらずやといふ聲、や、涙をおびたり。いかにして、かへり來りしぞといひも終らず、たゞ抱きに抱く。父上、母上はいつこといひしに、うしろの方を指す。まのぶは、をどりいらむとせしに、父は、まばしと、とどむ。そはまた、いかにといへば、汝を戀ひて、病ちこり、命も、ほとほと、たえなむとす。俄に、ちどろかしなば、なかなか、さはりにもやなりなむ。父、まづ入りて、かくと告げむ。よきほどに、汝を呼ぶべし。その時來れと、門に待たす。父のことばに従ひて待つ。待つこと、いと久し。父出てこず。また、呼ぶ聲もせず。母上には、はや、この世にはおはせぬなめりと、直に寢室へといそぐ。戸、かたくとぎして、開かず。父上いかに、母上いかにと、聲のかぎり呼ぶ。その聲きいて、人々、をとめよ、この子よとゆりおこす。目を見ひらけば、あなや、一場の夢なりけり。をりしも、波の音、いとまづかに、苦もる月影、いとまびし。

滄海原に、あまたの日數をかさねぬ。ある時は、雨にあひぬ。また、ある時は、風に吹かれぬ。また、ある時は、波にゆられぬ。されど、思ひきはめしまのぶのこゝ

ろには、うき事ども、思はざりしならむ。たゞに、うき事と思はざりしのみならず。その風や、その波や、なかなか、まのぶの爲には、心を勵すべき、よきすがににてありしならむ。たゞ、かの島に残ります、親の心は、いかに。雨のあした、風の夕は、いかに。また、波たちさわぎし夜半のねざめは、いかに。親を思ふこゝろにまさる親ごころ、大かた、ねられざりし夜のみ、おほかりしならむ。「たび人のやどりせむ野にまもふらばわが子はくめ天のたづむら」といふ古歌のこゝろにて、ありしならむ。ふた月ばかりをへて、やうやう、難波のみなとにつぎぬ。さて、舟より出でて、そのわたりを見わたすに、家どもたちならび、人のゆきなど、いとまげし。まのぶは、この世の中に、かゝるところも、あるなりけりと、いとめづらしうちもひたるも、いかに、あはれなることならむ。この夜は、船長なる、老人の家にやどりぬ。まのぶ、老人にむかひて、都へは、こゝより、幾里ばかりはへるかかと問ふ。老人、なほ、いとほるけくこそとこたふ。まのぶ、そは、また、いかにとて、涙ぐみぬ。老人、また、そなたの、身の上の事も、まかざりしが、都には、まゐる人にもあるにやと問ふ。まのぶ、別に、まゐるべとてまはへらず。たゞ、御門と

やらむに用ありて、のぼるなりとこたふ。御門とは、天子様のちん事をいふにや、
いかに。その天子様に、さこそあけて、父母の罪を、ゆるしたまはらむとおもふな
りといふ。老人は、うちぢどろきたるかほして、そなたの親だちは、いかなる人な
るか知らねども、そは、また、かたきのぞみにこそといへば、老のぶは、泣き出
しぬ。老人、ともかくも、都をこころざして、來りしなれば、一まつ、のぼり見る
方や、よろしからむ。都には、おのが知れる人々も、すくなからねば、文にても、
つかはずべし。それだに、たよりてよといふ。老のぶ、かずかずの御なさけ、身に
あまりて、うれしうおぼえはべり。父母を、都によびもどしたる後、父母の罪ゆる
されて、都にかへりのぼりたる後には、必ず、このみめぐみに、報いたてまつらむ
ほどに、おぼし、まちてよといふ。老人は、をさなき少女の、いふことなれば、何
事も、耳にはとめざりしならむ。されど、老のぶの心をいへば、老人への禮を、の
べむ時は、やがて、父母の宥さるゝ時ならむ。老人への禮を、のぶることを得ざる
時は、やがて、父母の罪を、ゆるさるゝを、得ざる時ならむ。さては、老のぶの今
の一言は、やがて、老のぶの宿望のあるところなり。老のぶは、心のうちに、必ず、

そのことばを全うせむと、かたく、ちかひしならむ。

あくる日、老人は、文二通まためて、老のぶにわたしぬ。一は 老人の妹へ、一
は、親しき友へあてたる文なり。老人は、金つゝみて、老のぶにあたへぬ。あまた
の金にはあらざれど、都へのぼるには、あまりあるべし。老のぶは、おしいたとき
で、うれし泣きに泣きぬ。そもそも、この老人は、いかなる人ならむ。はるけき海
原を渡ぎて、老のぶを伴ひ來るのみならず、今、また、文と、金とを、あたへたる
など、そも、いかなる人ならむ。この老人のめぐみにて、老のぶは、都へものぼる
ことを得しならむ。この老人のなさけにて、たよるところも、出てきたりしならむ。
さはいへ、老のぶにして、親をおもふ心なからむか、親を助くる心なからむか。い
かてか、かゝるめぐみを、うくる事を得べき。老のぶのごとき、孝心ならむには、
この老人なくとも、必ずや、他に、そをたすくる人あらむ。他に助くる人なくとも、
必ずや、天の神々は、助け給ふらむ。あはれ、都の路は、まだとほし。この行末や、
さからあらむ。

雪千首

余、病床にあり。今朝の雪に 層、病勢をつよめたり。たまたま、學弟服部躬治君、雪の歌千首をもてきたり。よみもてゆくに、いつか、心もうばはれて、身にも病もあるも、おぼえずなりぬ。獨見むも、さえゆく雪のあたらしければ、そのうち、おもきろしと思ふものを、左に。

親のため杖にさるべくわが植ゑし

庭の雪にかゝりやせむとこの朝け

居酒屋のほかけにたちて賤の男が

迷ひ子の母呼ぶこゑもたえだえに

みやこおほ路は雪にくれたり

雪のうちになちてものこふ順禮の

あひづる見れば親はなかりけり

雪ふみて紙くづひろふをさな子に

家をしとへば家はなしといふ

黒

八月十三日の夜、この文會の例會を、不忍池なる長醜亭にひらきたり。會するもの、僅に、五人。こゝに、五色の題を分ちて、文かゝむといふ議起れり。白をとらむには、そのいさぎよき様をいはむ、赤をさぐらむには、その赤き心をのへむ。青は、大空の色にもたとへむ、黄は、黄金の色によそへむ。たゞ、黒の色よ、なにのなつかしげもなし。こを得たらむには、いかにかせむなど、心のうちにつぶやき居たるに、あはれあはれ、その黒、遂に、ちのが手に落ちたり。そもそも、黒き色にて、なつかしきものは、なにかある。鳥にては鴉、獸にては熊。鴉は、その色にくきのみならず、その聲

など、まがまがしうさへもぼゆるよ。ことに、小鳥の子をとりて、わが子を養ふなど、
いかに、腹黒き鳥ならむ。熊、はたぢなし。その顔のにくさげなるはさらなり、他の
獸をとり食ひ、深山わたりにては、人にさへ、その害を加ふることありとかや。さ
るおそろしき獸なり、人の名につきても、さらになつかしからず。をの子の名に、
熊といへば、その下に、公の美稱つくるにも、なほ、いやらしう聞えてなむ。女の名
に、熊といへば、その上に、おの美稱を添ふるも、なほ、おそろしう聞えてなむ。こは、
他ならず。鴉といひ、熊といひ、その色黒きがためならむ。色の黒き佛を、不動といひ、
色の黒き人を、黒奴といへり。不動はおそろしきもの、黒奴はちろかなもの、こは、人
の、皆よく、知るところならむ。不動、黒奴は、外國のものといはむか、わが國にても、
男女をとはず、色の白きをたふとび、色の黒きを嫌へり。さては、まろを尊び、黒
をいやしむは、東西にかよへる人情ならむ。黒金は、黄金、まろ金にくらぶれば、そ
の價たふとからず。黒砂糖は、白砂糖、氷砂糖にならぶれば、その味あまからず。
黒慈姑は、つねの慈姑に、よそふへくもなく、黒鯛は、つねの鯛に、なすらふへくもな
し。また、鮓にもあれ、鯉にもあれ、その黒肉は、食ふべきものともおぼえず。す

てたればとて、犬も、猫も、食はずやあらむ。碁を圍むにも、下手は、必ず、黒石
をもつにあらずや。歌留多とるにも、負けたる人は、墨をぬらるゝにあらずや。黒
雲といへば、雨よと騒ぎ、黒烟といへば、火よとさげふ。共に、よきものにあらず。
墨染の袖、こは、父にわかれ、母におくれたるをりなど、身につくるもの、その名を
きくも、いまいましてなむ。晝にくらぶれば、夜はすさまじく、ことな、やみの夜な
ど、ものゝあやめもわからぬにあらずや。このやみの夜よ、春の花のために、秋の
月のために、いにしへより、幾人の心をかなやまし。貫之の、やみはあやなしと
恨みしも、げに、さることになむ。みだれたる世を、暗黒世界とよび、わるものゝほ
しいまゝなるを、百鬼夜行といへり。いづれも、思ひ、へきことのかぎりこそ。ちか
ごろ、また、黒幕といふものもさこゆ。こは、いかなるわざをするものなるか、よくは
知らねど、さまで、よきものにもあらぬにや。また、泥坊といふものあり。頭に、黒さ
頭巾をかぶり、身は、黒き衣をまとひ、晝はねて、夜はたらし、ことに、風雨おどろお
どろしき夜など、人の家に忍び入り、物盗む。その心、にくしともにくし。世に、夜
といふもの、やみの夜といふものなからむには、かゝるものもあらざらむを。おも

ひつゞくれば、黒といふ色ばかり、なつかしからぬものはあらぬかな。とはいへ、そのうちに、よきものも、一二つはあらむ。そを考へて、この文を結ばむと、櫻干のもとに、立ち出てして、藤園の主人、壽といふ題を得て、青くなりて、考へ居たり。おのれ、主人に向ひて、黒き色にて、よきものはなになるかといひしに、墨といふものありといふ。それよ、墨をわすれたり。おのが文、これにて成れりと、嬉しう思ひ、もとの座につきしが、なほおほふに、この墨とて、けがらはしき筆をふるひ、社會をみだすものなど、おほく出てくる見れば、こも、よきものとのみは、さだめがたしや。さては、なにをととり出て、この文を結ばむと、おもひわづらふをりしもあれ、蓮の上風、さど吹きて、燈火さえにけり。ふたゝびともしたるに、また、さえにけり。こゝに、そのくらしをかごとにて、筆をさしおきたり。あはれ、この燈火、消えずあらば、この結文を、かゝすやまむことも、なりがたからましき、おもへば、これ一つのみは、黒きもの、否、くらしの夜の賜にこそ。

革囊

幸といひ、不幸と云ふは、そのものにつきていふ事にて、その幸も、他の物のためには、不幸にて、その不幸も、また、他のためには、幸なるかも知るべからず。雨降るを、つよやく人もあれど、傘賣る家にては、いみじう喜ぶとかや。日照るを、うれしがる人もあれど、足駄賣る店にては、いと心憂きことに思ふとかや。おのれ、さきつ年、古きものども賣る家にて、一つの革囊を買ひ得たり。物など入るゝに、いとたよりよかりしかば、おのれのためには、こよなく思ひ居たれど、革囊のためには、いかゞあらむ。その革囊、ところどころやぶれたるは、あまたの人々の手を、經たることあきらげし。やむごとなき人のもとにて、かじづかれたるをりもありしならむ。いみじういやしき人のもとにて、つらき目見たる事もありしならむ。富める人の家にては、巨萬の金を入れられ、貧き人の家にては、その金にかゝはれる、催促状のみ入れられたるならむ。かくて、その革囊のために考ふるに、いづれの時が幸にて、

いづれの折が不幸なりしか。やむごとなき人の手にありし折は、幸なるが如くなれど、他に、うるはしき革囊のあまたありて、なかなか、時めくこともえせざりしかも知るべからず。いやしき人の手にありし時は、不幸なるが如くなれど、さる事もなく、なかなか、うるはしう、もてかしづかれたるかも知るべからず。又、富める家にありし時は、その中なる金のために、掏兒などに、目をそゝがれし事のありしかも知るべからず。貧き家にありし折は、さる事もなく、なかなか、心のどけき事のありしかも知るべからず。いひもてゆけば、その幸不幸、たやすく定め難きにや。この革囊よ、わが許に来てより、はや、二とせあまりを経たり。おのれは、朝夕に、そをいつくしみ、花見る日も、月見る夜も、傍を離たず。かくて、その中に入る、物としては、墨、筆、硯、歌の草稿、文の草稿など、いと清らかなるものゝみにて、金の如き、けがらはしき物は、ひとひらも入れず。さては、必ず、うれしう思ひ居るならむと思へど、そは、おのが心にて、革囊の心には、いみじうつらしと、思ひ居らむはかられず。歌文の草稿、おのがためには、こよなきものなれど、革囊よりいふ時は、かの借金の催促状と、かはる所もなからむ。墨、筆、硯、おのがためには、こ

よなきものなれど、革囊よりいふ時は、瓦石とえらぶ所もなからむ。いひもてゆけば、わが幸ならむと思ふ所も、革囊のためには、なかなか、不幸さはまれりといふならむ。人ならば、問ひても見まほしけれど、大きな口こそあれ、答ふべくもあらぬを、いかにかせむ。一月廿五日の夜、盗賊、わが家に忍び入り、きものなど、ありのことごと、もて行きたり。革囊はいかにといひしに、それはた無し。かれの歌も入れ置きたりしを、くれの文も、入れ置きたりしをなどいへど、何のかひかあらむ。取られたるものが身の不幸、かくの如くなれど、革囊その物は、なにとも思はざらむ。われををしむは、われををしむにあらず、中なる草稿ををしむのみ。日頃、われをいつくしみしも、今より思へば、われをいつくしみしにあらず、中なる草稿をいつくしみしのみ。かゝる紙屑のみめづる人よ、さる人とは老らず、今まで仕へぬるが口惜しと、うちつぶやき居るならむ。よくこそ盗みくれたれと、盗まれたるを、幸に思ひ居るならむ。あはれ、かの革囊よ、今はいづこ。やむごとなき人のもとにあるか、いやしき人の許にあるか、富る人の許にか、はた、貧き人の許か。幸か、不幸か。

木母樹

下總なる香取にもものせむとて、巴戟天舎主人義象氏と共に、なにかと、用意してありしに、一人の客の、たづね訪ふあり。一室に請じたるに、條約改正論、非條約改正論など、あまたの人々の文章を出して、君の論はいかにと問ふ。おのれ、つたなき論なきにあらねど、こゝに、のべ盡すこと能はず。ことに、今日は、香取へものせむ約束あれば、さるいとまもあらず、さらば尋ね給へといふに、さらば、またまゐらむとて、歸り行きぬ。

見送りて、ふたしび、座につきまもあへぬに、傍なる巴戟天舎主人、われわれのもとに来て、さる論をさかむとするは、いかなる人ならむ。世には、政治家も多からむになどいふ。誰は改正論者、誰は非改正論者、誰の論は、かくの如く、誰の論は、かくの如しなど、おぼし、政談に、時を移しぬるもをか。時に、時計、午後の六時を報ず。すべての事は、車にて物語らむと、合乘していでたり。

おのが門を出づる一町餘、目赤不動堂あり。目黒、目白の二不動と共に、その名、世に聞えたり。巴戟天舎主人、目赤、目黒、目白の三不動あり。目青不動といふはあらぬにやといふ。あまたありといふに、いといふかしく思ひたるけしきにて、そはまた、いづこにといふ。君知らずや、緑眼奴は、皆これ、目青不動にあらずやといふに、おもしろしといひて、うち笑ふ。そも、目赤、目黒、目白、その名こそかはれ、ひとしく不動なり。不動は、右手に、降魔劍をもち、左手に、鐵索繩をもち、そのさまおそろしけれど、もとこれ、觀音の化身、惡魔を懲して、世の人々を救濟せむに外ならず。目青不動にいたりては、然らず、われわれ同胞を、輕蔑すること甚しく、ともすれば、われわれの住むなる、この國をも奪はむの心あり。おのれは、條約改正論者に問はむ。かゝる不動を、われわれと雜居せしめて、何等の利益かあると。

萬世橋にて、車を下り、そこにて、物など買ひて、鐵道馬車に乗る。乗客は、われら二人を合せて六人。なほ足らずといふにや、車を出さず。一人來り、二人來り、ほとほと十人にもなりにたり。馬車、駆け出さむとするをりしも、鐘の聲す。火事ならむといひさわぐに、御者、火事の鐘にはあらず、ニコライの鐘なりといふ。人々、なにニ

コライか、あゝ安心したといふ。安心とはいかに、まことの火事は、たゞ、家屋を焼くのみ。こはこれ、人の心をやき、遂には、この國までもやき盡すものなるに。

今川橋をわたりて、すこしばかり行くほどに、一人の西洋人のり込みたり。この人、さ
はめて、肥えふとりたるものにて、席をふさぐる、殆ど、われわれ日本人の三倍なり。
ゆるやかなりし車も、俄に、狭くなりたり。傍なる老婆、尻を、一尺ばかりも、左さまに
送りしが、その傍なる官員も、また、尻を、一尺ばかり、左さまに送りたり。その左は、
やがておのれなり。おのれも残念なれど、一尺ばかり送れり。隣の人も、こゝに、おの
れ、つくづく思ふやう、この西洋人は、われわれの三倍の體格をもてり。さるに、三倍
の賃金は拂はず。われわれの身にとりて、つまらなきことにあらずやと。やがて、鉛筆
とりて、外人雜居の弊害はいかにと書きて、巴戟天舎主人に示したるに、主人、見て笑
ひ居たり。主人は、向側に居たれば、あまり影響をうけず、故に、おのれの感じたるほ
どには、感ぜざりしならむ。

日本橋にて馬車を下り、こゝにても、物など買ひて、ふたゝび、人力車を走らす。彌敷
町の瀛船宿に着きたるは、七時三十分ごろにもやあらむ。八時の出帆といふことな

れば、待合所に入りて憩ふ。百姓、町人、漁父、議員、代言人、宣教師、子供をつ
れたるものもあれば、妻を伴ふものもあり。まばしの間、その人々の話を聞くに、
實に、聞くに堪へざるこのみなり。これらの人々の腦裡には、日本といふ觀念あ
りやなしや。

汽笛一聲、人々、のりこみぬ。汽笛二聲、船、岸をはなれぬ。月もなければ、海も
見えず。利根川を上り上りて、行くほどに、夜、いたう更けたり。新聞などとり出
てて見るに、ある奴、外人のために、家屋と土地とを周旋して、買はせたりなどい
ふことあり。その奴の系圖はいかに。必ずや、蕃別ならむ。そのいさどほろしさに、
さらにもまごころまれず。一隅なる宣教師、まきりに、書を読む。いかなる書かと、窺
へば、井上氏の教育と宗教との衝突なり。をりをり、面ふくらかすは、腹だたしき
ところならむ。をりをり、面あからむるは、心やましきところならむ。さて、その男
の革囊を見しに、秦某といふ札をつけたり。あはれ、これも蕃別か。

疏水のあたりにて、夜、全く、あけはなれたり。船窓あけて、川風にうち向ひ、まき
しまの大和心の歌うたひたる、そのをりのこゝち、いみじうすとし。源太河岸を

過ぎて、半里も行くに、右の岸に、うるはしき森あり。式内の神社のあるところなり。そこに、ナンヂャモンヂャといふ木あるよし、乗合の人、物語れり。いかなる木なるかといひしに、そのさま、普通の木の類にあらず、その名もわかねば、昔よりナンヂャモンヂャといひしなりといふ。あはれ、その木よ、日本の木なるか、はた、外國よりわたれる木なるか。世にはアロノコといふものあり。日本人にもあらず、西洋人にもあらず、おのれは、今より、そを、ナンヂャモンヂャ人といはむ。津の宮にて、船を下りぬ。午前十一時すこし過ぎたり。車にて香取に行き、そこなる宿に着きぬ。晝食たうべて、香取神社にまうづ。たふとしもたふとし。宮司、禰宜などの案内にて、社頭をうちめぐりに、めぐらかに覺ゆることども多かり。こゝとに、あやしきは、木母樹といふ木なり。その名は、水戸義公の、つけ給へるものなりとか。大なる杉の股に、一本の、椎の木の生ひたりしが、その椎の木、いやふとりにふとりて、遂に、その母なる杉を裂き、今は、その杉枯れて、椎の木のみ、雲井高く、生ひのぼれり。義公木母樹とつけ給ひし見れば、杉は母にて、椎は子なり。その子、母をころして、ひとりさかゆるなど、いかに不孝の子ならむ。おのれ、こ

の木を見て、また、條約改正のこと、思ひ起したり。外人雜居のこと、思ひ起したり。はじめは、わが日本人、母の位置にて、外國人をやどさむも、やがては、外國人にはびこられて、かの杉の如く、うち裂かれ、うち枯らさるゝにいたらむか。思ひ續くれば、かゝる木を、今まで残したまへるも、經津主の神の深き神慮ならむか。夜更けし、旅館の燈火をかゝけて、かくなむ。

七日七夜

その一

むくつけ雨に、花は散りぬ。大博覽會の開館は、けふと聞けど、われさきに、争ひ見たりとて、手柄にもならざるべしなど、理窟をつけて、實は、雨がいやさに、都を出で立ちしは、四月一日、まだ、曉ふかき頃なり。

新橋に至れば、汽車は、例の煙をたてつゝ人待ち顔なり。春は、都のみかはと、まづ、

思はれぬ。カバンの位置、いまだ、定まらぬ中に、車は走りて、大磯わたり、うち過ぎぬ。けふは、天気、いとすら、かなれば、窓押しあけて見るに、もえ出づるわか草、今を盛に、炭竈の烟、細く、靡きたり。浪の花のみ、白く見えて、櫻の、いと少なきは、中央集権の御代とて、永田町の園生にや、寄寓しけむ。足柄隧道の、暗黒世界を過ぐるころ、川ごしに、躑躅、山吹などの咲きたるは、魁けられたる心ちして、くちをし。十時ごろ、御殿場につきて、車より降る。御厨町なる、富士屋にやどる。名に負ふ高根は、庭の物なり。

久方の天をもまのぐふじのねの

あかぬけしきはかくてなりけり

ひるげを終へ、まるべする人を頼みて、尋常小學校を見る。校舎、いと整ひたり。それより、鮎澤なる中御門宗行卿の御墓に詣づ。畔道づたひ、架橋をわたりて、行く。うるさき油畫にあさし心、洗ひやられて、いとすがすがし。

むかひの方より、一人の翁、腰うちかゝめ、手さへ合せて、足中とかいふ草履を穿ち、徐に、寄り来つゝ、君たちは、都の人なんめり。この里に、近き頃、めづらし

きみものこそ侍れ。いざ案内せむやといふに、つれて行く。げに、牛七八頭ならては、引き得まじと思はる、大石あり。翁、まほたれがほに、いひけらく、こは、要石とて、人の障らぬものなり。そは、蒸氣車の開くる時、技師博士の何要とかいふ人の、この土地を、いと安くも、買ひ占めたまひ、近きころ、この家居作らむとて、二里あまり隔たれる谷川より、汽車に載せて、かくは、運ばせたまひしなり。かゝるよき地となることを、まだきに知り居らば、賣らざりしものを。田舎者のくちをしさに、さる事とも知らず、安く賣りけるが、くやしきなり。されば、この石に障れば、慾の神のとりつく事なりとて、誰も、よりつかざりしに、いつの間にか、要石と字して、人も見ることゝなれりなど、かたる。その聲、泣くが如く、訴ふるが如く、語るが如く、嘲るが如く、いと不平がほなれば、そは、何といふ人ぞと、くりかへし問ふに、詳しくは、知り侍らずとて、いづこへか行きぬ。あはれ、かゝる石は、東京なる吾妻橋の礎にも、すゑましかばなど、いひつゝゆく。

さて、一二町ばかり行けば、五尺あまりの石碑たて、石垣つきなしたるは、即ち、宗行卿の御墓なり。拜みまつるより、まづ、袖ぬれぬ。承久のむかし、北條の逆臣、

この君を捕へまつりて、こゝにて、失ひまゐらせしなり。碑文、誤字多くて、讀みやすからねど、卿の義を慕ふ心の障とはならず。

尋ねきてむかしを忍ぶわが袖に

さくら花ちるはるのゆふぐれ

ゆふもとりあへねば、せめての事とてなりけり。足柄山の松風は、その世の聲さへうちそへて、いとあはれに、ものがなし。

こゝより、少し行けば、分れ川といふところあり。こは、あなじく、富士より流れ出づるものから、一は、酒匂川に落ち、一は、黄瀬川にゆくなれば、まかいふとぞ。いと清き水なれば、掬ばましなどいふに、案内者、いへらく、これには、をかしまし話を待れ。夫婦中あしくて、離れむとするに、え去りがたき事ある時は、この川の水を飲めば、あつづから、互に面にくくなりて、三行半の筆の雫となるに至るべしといふ。いとあぢきなし。いまいましき川なりやなど、つまはじきして還るも、われながら、をかし。

夜、雨、いみじう降る。むくつけ雨、またも、降り出てぬなど、互に、つよやくと

脚きて、宿の女、丸髻うちふりつゝ、いへらく、こは御厨の私雨とて、この地にのみ限りて、降るものなり、といふ。さんなりや。天地の神も、私志たまふとは、今めくものか、などかこちつゝ、衾の中に籠城す。夢見あしきなるべし。

その二

二日、わたくし雨、なほ、やまず。人々、つよやく。予は、今は世に、わたくしするものは、この雨のみならむやはと、いひしに、皆、笑ふ。八時過ぐるころ、やむ。九時五十分、佐野に赴かむとて、汽車に乗る。室の隣に、貴婦人あり。洋服着たる、下女的のわかき女、七八人、従へり。便所にもせむとて、出て入るさま、いとみにくし。ことに、をかしかりしは、その中の一人、装籠なす尾をひきて、はしり行きしに、後なるひとに、ふと履まれ、前さまに、たふれ伏したるなど、この日の見ものなりけり。とかくするうちに、例のはしり出てぬ。富士は、雲にかくれて、見えざれど、足鷹山、足柄山、箱根山など、左右に見えて、あもしろし。川あり、そを

すぐれば、橋あり。そをわたれば、松林あらはれ、くぬ木原、麥生など、窓外のながめ、いとよし。時の間に、佐野につく。

停車場より、ほど遠からぬところに、佐野原神社あり。こは、冷泉爲冬卿を祭れるなり。卿は、延元のむかし、尊良親王に従ひて東下し、竹の下の戦に、軍やぶれて、討死し給ひしなり。そのろに、むかし戀しくて、

ふしをがむ袖もまどにぬれにけり

こやますらをのなみだなるらむ

こゝには、佐野の瀧とて、めづらしき瀧ありときけり。車をいそがす。畔道づたひゆくほどに、このわたり、道路いとあしく、車の轉覆せむとしたる事、たびたびなり。哀訴嘆願して、車より下りむとせしかども、車夫は、さゝいれず、いや走りに、はしりゆく。そのおそろしき、そのつらさ、いふばかりなし。かゝるうきめにあはむと知らむには、都を出てつる時、生命保険會社に入社して、來らましものをなど思ふも、あはれなり。とかくするうちに、例の瀧のもとにいたりぬ。こゝは、黄瀬川の水源にて、右の方なる二瀧は、箱根の湖よりいで、左の三瀧は、富士のふもと

より、ながれくるなりとか。中央に洲あり。そのなかに、二三軒の東屋あり。そこよりながむるに、巖に、花咲き、かたへに、桃にほへり。まことに、仙境の如し。

おちたぎつ瀧の白泡こゝろあれや

岩のさくらのちりもこそすれ

かゝる瀧、かゝるながめは、また、世にあるべしとも思はれぬなり。あはれあはれ、かゝるところの、都のあたりにあらむには、いかゞあらむ。かゝる山間僻地にありて、知る人もなく、訪ふ人もなく、造化の美景を埋没せしむるは、實に、口惜しからずや。かの鹽原、かの箱根、あるは日光、あるは伊香保、あるは磯部など、いかてか、このところにおよばむ。さるを、彼は、人々にめでられ、これは、知る人もなし。その幸不幸、いかにぞや。さはいへ、かの鹽原の如く、かの伊香保の如く、かの日光の如く、磯部の如く、箱根の如く、俗人の住家となり、ことに、貴顯とか、紳士とかの別荘、軒をならぶるにいたりては、實に、厭ふべきことなり。さては、このところの、さる人に知られざるは、なかなか、幸福ならむ。瀧は、ものいはねど、山は、ものいはねど、必ず、予と同感ならむ。さて、こゝには、旅籠屋もあらねば、あ

る知人の家にやどりぬ。庭にありたちて見るに、富士のながめ、いふばかりなし。たゞ、かの寶永山のコブ、また、アナ見ぐるし。予、大聲疾呼して、天下の有志者諸君に告ぐ。諸君よ、諸君、もし、この山を、日本の名山と思はむには、この山を、國のまづめと思はむには、かの寶永山のコブを削り給へ。かのアナを埋め給へ。予は、斷然、その事に従はむと思ふなり。諸君、以て、如何となす。宿のあるじにいざなはれて、此處彼處、見にゆく。いづれもいづれも、都人にはめづらし。歸途、ある山路にかゝりしに、ある貴公子の、鐵砲携へて、遊獵するあり。また、例の人などうたぬさきに、やめたるかた、よからむと、いらぬ心配せられぬ。別に、よき獲物もなかりけむ、梢に居たる鳥をうたむとせり。鳥も、命やをしかりけむ、阿房阿房となきつゝ、飛びゆく。この宿の庭に、いと大いなる牡丹あり。あるじいふやう、この木、もとは、時めきて、花咲くころは、庭のうち、人の足跡ばかりなりしに、この頃や、ちちぶれて、問ふ人も稀なりなどかたる。あはれの事や。伊藤伯に奉らばやなどいひてわかる。

その三

同三日、晴。けふは、神武天皇祭日なれば、皆、起きいてて齋戒、祝杯を擧ぐ。まゝ富士にむかふ、心いとすゞし。晝過ぐる頃、こゝを立ち出づ。庭の牡丹、別れを惜みがほに、うち靡く。例のこちこちしき道を、車夫は、力にまかせて、いや走りにはしる。その足は、鬼の如く、臂は、墓の如く、その腹は、狼の如し。川あり、石出づ。橋あり、頽れかゝれり。眼こそ、二つはあれ、たゞ、一つある身を、うちはめられはと、たびたび、ちろしてよといへど、彼は、更に聞き入れず。濁み聲にいひけらく、尊公、あはれみたまへ。かく、道のあしきは、おのれらのくらしのよきなり。もし、平坦の道ならましかば、誰か、かゝるめにあひたまふべき。さらぬだに、鐵道といふもの出て来て、不平なるに、この道さへ、よく備らば、われらは、餓鬼世界の住人となるより外なしなどいふ。いと大聲なり。

道の傍に、三榎多し。紙幣増發の折柄、いと頼もし。やゝ行けば、境川といふあり。駿河と伊豆との境界なりといふ。菜の花、心あるにあらず、麥の穂、何を吾に心あ

らむや。唯、歴史的感情は、何となく、心を痛ましむ。世の教育家たるもの、宜しく、考究すべきなり。三時頃、三島宿につく。人々、來むかふ。心あるに似たり。やがて、世古六大夫の家に宿る。この家は、本陣とかいひて、もとは、諸侯の、江戸上下の時、必ず、宿られしものといふ。家居の作りざま、當時を偲ぶに餘りあり。上々段、上段、下段、書院など、そのまゝにして、天保老人は、涙をおとすめり。あるじをよびて、いはれを聞くに、寛永年中に、本陣職になりて以來、世は、數多經ぬれど、造りざまは、もとのまゝなり。そもそも、東海道中に、本陣と唱ふるもの、百三軒ありしを、維新以來は、多くは、劇場、郵便局、學校等になり行きて、今、残れるは、たゞ、この家のみなり。されば、後の人に見せむために、年々、修繕して、かく保存し侍るなりといふ。あはれ、かゝる人も、世にあることかな。障子を破りて、ガラスにかへ、天井に、紙を張りつけて、強ひて、西洋めかさむとする習ひなるに、殊勝の事なりなどいふ。夜に入りて、人々、訪ひく。少女、出てきて、酌す。その目、星の如し。孰れのものなるかと問ふに、もとは、都のものなるが、去にし年、こゝに來て以來、都の空のみ、うちながめつるに、いつしか、かく目も腫

れにたりなどかたる。をかしくも、またあはれなり。四日、天氣よし。この家の扁額に、對岳第一館とあり。富士山、たゞ、目の前なり。たゞし、例の寶永山のあと、さだかに見ゆ。修繕論、いよいよ、切なり。朝食たうべて、三島神社に詣つ。神主、出て來て、寶物など、見せつ。そのうち、最も、珍寶と思はれしは、平政子の所持せし金の蒔繪の櫛笥、鍋島加賀守が献納せし島原の陣に用ゐし太刀、宮内省御寄附の菊一文字の御太刀。また、文學に屬するものには、三島本の日本紀六卷、鳥丸光廣卿の、自筆の巻軸など、いづれも、めづらし。光廣卿の巻軸は、菅公の御書にそへて、奉られしものなり。菅公の御書とは、法華經なり。もと、この社のものなりしを、一度、散逸せしが、そを、光廣卿の見出て給ひて、ふたゝび、納められしなり。さらに、その後、また、散逸したりとか。近年は、巻のうち、二卷のみは、見出てたりとて、納めあり。筆力雄健、實に、稱すべし。あはれ、他の六卷は、何處にあるならむ。古文書類、また、多くあり。某博士に見せたらむには、おもしろき論もあらむなど笑ふ。神前に、鳩、いと多し。旅客のあとおひて、物を乞ふさまなりしかば、買ひ求めて、與へしに、庭鳥、あまたよりきて、

鳩、おひやりて食ふ。優勝劣敗とはいへ、いとにくし。そこを出て、市中を見めぐりしに、ところどころに、貸坐敷あり。東京に、遊女學校のおこらむには、このわたりにも、その分敷場、必要ならむ。

午後二時、沼津にものしつ。諸學校を見めぐる。この日は、臥牛山のふもと、例の海水浴に名高きところにやどりぬ。宿は、三島の世古六大夫の支店なり。夜に入りて、月いとあかく、海上のながめ、いふばかりなし。

同五日、雨ふる。朝、疾く起きいてて、後の山に上る。凡そ、五六丁ばかりなり。海のけしきは、いふも更にて、そがひに、富士の嶺高く聳え、千本松原、目もはるばるなり。たゞ、むかうなるは、寢釋迦山、それに隣れるは、鷲津山、右のかたに、かすかに見ゆるは、久能山など、宿のあるじ、語る。そもそも、この地は、沼津の停車場より、凡そ、二十町ばかりの處にして、海水浴あり。けしきさへ、えもいはねば、旅人の情を慰むるに、最も適せり。されば、はやう、貴紳の別荘など、まつらひたり。げにや、鐵道開けて以來、名勝の地は、大かた、貴紳の別荘あるに至る。山の神も、海の神も、腹鼓をうちて、喜びたまふなるべしと、かしくし。岸の白な

み、峰の松風、はた、心なからむや。

午前十時ごろ、こゝを出てたつ。平作的の車夫、荷物をはこび、お米的下女、わかれをしむ。かくて、沼津の停車場に至る。今日は、陸海軍の演習終りて、兵士のかへるなりとて、汽車、甚だこみ合へり。予等は、もと、平民的の旅行なれど、汽車のみは、いつも、上等にのりたれば、その心配なし。今日、乗り合ひたる人々は、予等同行三人と、ある貴顯一名に、家従のつきそひたる、外に、地方の判官として、その名を知られたる夫婦連なり。一名の貴顯は、温厚の長者にて、ものいふも、かりそめならず。それにひきかへて、判官夫婦の面にくさ。予輩の目前なるにもかかはらず、手を握り、足を巻き、互に、さゝやくその聲、かしがまし。婦の身分は、さだかならねど、をりをり、赤裳の裾を出して、たちありく見れば、例のならむ。顔は、奥津鯛の如く、鼻は、薩睡岬の椎茸の如く、眼は、静岡の山葵漬の如し。判官殿のいてたちは、フロックコートに、金の時計の鎖を、猪頸にかけ、鬚のまばらなるは、三保の松原の如く、口は、清水港の如し。とかくするうちに、巻煙草を出して、口にくはへぬ。婦は、マッチを出して、それに火を附けむとす。汽車の動搖と

共に、あやまちて、鬚を焼きてけり。人々、笑ふ。富士河をわたり、田子の浦をすぎ、江尻をへて、午後一時ばかり、静岡につく。大東館にやどりぬ。夜すがら雨やまず。

その四

同六日。きのふよりの雨に、旅中の一友たる富士の山を見ず、いと戀しかりしに、けさは、こゝちよく晴れて、いとうれし。一日千秋といふことは、戀人のみにはあらざりけり。朝食をはりて、淺間神社に詣づ。社は、倭布機山の麓にあり。神主等、待ち迎へて、何くれと、案内す。奥の院といふは、本社より、五六町ばかり登るところなり。花ははや散りて、若葉のみづみづしきには、人心、一層、うき立ちぬめり。色黒く、垢つきたる、賤の男、賤の女、手とりかはして、立ち歩く。都の舞踏は、これのやゝ進歩せるものにやなどいふ。人々、笑ふ。休息所あり。老女がすゝむる溢茶に、まばしの疲れをやすむ。犬あり、走り來れり。耳ふり立て、尾を左に巻きたり。これ、純粹のわが國の犬とは知られぬ。まことや、維新以來、歐米との交際

開け、遂に、人種改良論とかいひて、低き鼻にては、心もとなし、鬚は、紅にて染むべし、背の低きものは、義足を補ふべしなど、かしましかりしに似ず、その實は、なかなか遅れたるを、犬は、とくにも、この理を悟りてか、近き頃、都にて見るかぎりは、悉く、歐米風なるは、見る人は、喜びもし、愛もしつべし。さるが中に、この犬は、いと珍らしなどいひて、あはれがる。犬、もし、心あらば、思ふやうあらむや。臨濟寺といふは、こゝより、十五六町の處にして、徳川家康の、幼少のころ、居られし處といへば、行く。道、いとおもしろし。小僧、出て來て、案内す。作りざまの、ゆかしきは、さるものにて、庭の松、巖の水、都にては、夢にだも、見ざるけしきなり。寶物、凡そ二三十點、金岡の佛畫、西行の軸物などもあり。本堂には、今川義元の肖像、長老雪齋の肖像、家康の肖像などあり。いづれもたふとし。茶室のさゝやかなる、手習の間のめづらしき、その世のさま、惚ばれぬはなし。それより、安倍川へと、車をいそがす。至りつくやがて、安倍川餅をたうぶ。これ、飢ゑたるにあらず、古の道中の味を知らむとなり。こゝより五六町ばかりなる處に、由井正雪の墳墓ありと聞けば、又見にゆく。あれたる田づらに、小祠たてり。守る人

もなきにや、草生ひまげれり。この男の事は、いまだ、世論も定まらざれども、手等は、先年、谷中將の、史學協會にて、演べられしことを、深く信じ、ふりはへて、弔ひ來しものなり。古文書崇拜博士は、何といふとも、宿にかへり、無聊なるまゝに、劇場にものす。いとをこがましく、更に見るに足らず。もし、これを以て、この地の開化をトすといはざれば、縣人は、青筋たて、あこらざるをえざるべし。けふ、隣の室に、人、さばに來ぬ。下女など、足を空に、立ち歩く。何事にかと、耳をかたぶけて聞けば、をりをり、三位様など、いふ聲す。かしこき五爵の中なんめりとおもへば、いとあそろし。とかくする中に、酒肴など、とりさわぐ。よく見れば、多くの人々、かの殿様を圍みて、もてはやすなりけり。殿様は、所えがほに、うち興じたまふ。三絃こそなけれ、〇〇こそ居らね、その談りたまふことは、かゝる筋なめりと聞けど、摩子ごしにて、よくも分らず。やうやう、酣にならむともふほど、發車の時至れりと、下女がいふ聲に、足ぶみして、出て立たれぬ。いとくちをし。旅行は、人の本性見ゆるものなれば、能くつゝしむべきこととなりなど、つぶやきてねぬ。

その五

七日、晴。尋常師範學校、尋常中學校を巡覽す。何れも、校長出て來て、案内す。午後十二時四十五分の汽車にて、出發す。乗合人は、洋裝の令嬢と、和裝の令嬢となり。和裝の方には、老婆從へり。二人とも、年二十前後なめり。その談話を聞くに、同行の人ならざるは勿論、その主義思想も、全く、反對のやうなり。一は、牛糞的に、シユリゲンの蓋薇花をかざし、一は、蜻蛉的に、朝日的の櫻花をかざし、洋裝、カパンより、イスト、リオンを出して讀めば、和裝、風呂敷より、紫式部日記を出して讀む。洋裝、フロロ、ユーエロランを吟ずれば、和裝、田子の浦の歌をうたふ。予輩は、江尻、興津、の二停車場を過ぐるまで、ものいはず。こは、色氣づくりてにはあらず、二嬢の容貌動作の、あまり懸隔せしに、呆れてなりけり。予輩は、室外に出でて、喫烟す。洋裝は、當然といふ面してあり。和裝は、氣の毒といふまなり。興津より、二人の士官、のり込みぬ。巻烟草をくはへてありけり。洋裝、

そを見て、額に、皺をよすれば、和装、また見て、心地よげに、うち笑む。かの士官、富士川をわたるころ、かの水鳥のことなどいひ出でて、源平の勝敗など論せしが、維盛と重盛とを、混雜したるも、をかし。鈴川のあたり、浮島が原、目もはるばるなり。月夜のながめよしとさきて、

さ夜ふけてまたも見に来む久方の

つさのみふねのうさままがはら
沼津にて、

この里に住みても見ばや富士の嶺の

たかきこゝろをこゝろにはして

佐野も過ぎて、御殿場にかゝりぬ。小雨、又ふりさぬ。かへすがへすも、不可思議なりや。この停車場にて、二人の士官は、下車す。例の黑白世界を過ぎて、國府津につく。二人の婦人は、申し合せたるが如く、こゝより下りぬ。洋服は、面ふくらかして、揚々として、出でゆく。和装は、予輩に向ひて、いとねもごろに挨拶して、いで行く。共に、教育の然らしむるところとはいへ、かくも、上下あるものかなと、

思はず、歎息せられたり。やがて、入り来りしは、洋人の老夫婦の、三人の子を伴へるなり。長女は、二十一二歳ならむ、容貌うるはし。次女は、十二三歳ならむ。これらはた、らうたげなり。次は、男子にて、僅に、五六歳の稚兒なり。さし、この長女は、前の洋装に較ぶれば、服装、及び、言語動作、實に、月とスツホン。予輩は、日本人なり。日本人をホメたきは、山々なれど、實際、及ばぬをいかにせむ。残念至極なる哉。大磯にて、男女の二人、乗り込みぬ。純乎たる夫婦とは、認定し難し。音に、認定せられざるのみならず、例のなること、その言語動作にて判然たり。予輩は、審美的の眼光を具有せず、無粹者なり、野暮人なり。この無粹者にして、この野暮人にして、猶、よく發見するを得たり。そのさま、思ひやるべし。これをささの和装にくらぶれば、そもまたいかならむ。實に、世は、さまざまなりや。藤澤より、日、全く暮れぬ。戸塚のあたりにて、レールに損處ありとて、車をとどむ。人々、どよめく。掛員を呼びて、たづねたるに、今夜、いづるや、いでざるや、わからずといふ。いと心ぼそし。一時間経ても、二時間たちても、猶、出でざれば、皆人、困じたり。殊に、あはれなるは、洋人の一行なり。小兒共の、飢になくなど、見るに忍

びず。彼の例的は、そのさまのつねにかはれるを見て、まきりに笑ふ。無禮の極といふべし。例的はよろし、それを伴ひたるフロックコートこそ心得ね。かゝる禽獸的も、予輩の同胞兄弟なるかともへば、悲し。予輩は、農家に入り、鶏卵をユデさせ、そをもとめきて、かの小兒に與へしに、そのよろこび、いふばかりなし。四時間すこしすぎて、漸く、汽車出づ。横濱にて、乗合の人、皆下車す。これより、新橋までは、予輩の一行のみなり。汽車のうち、いとまづかに、月、窓に入る。今回の旅行中、不平のちこらざりしは、たゞ、今宵の月のみ。あはれ。

この日記を、七日七夜と名づけしは、まこと、七日七夜にて、かへりたればなり。又、一二三人とは、同行三人なりしなればなり。その三人とは、貴公子中の不平者とさこえし、サタ居士と、巴戟天舎主人と、萩の家主人とをいふなり。巴戟天舎、はじめに、筆を起し、萩の家、後に筆をとらむ。そのうち、五日目の記事は、巴と萩との合作なり。サタ居士は、別に、筆はとらざれど、紀行中の議論にいたりては、與りて、大に力あり。

眞如の月

その一

嵯峨野の奥に、ひとつの古き寺あり。築地など、うちくづれて、見るかげもあらねど、門のうちには、萩の花、いとなつかしく、さきにほへり。門と堂とは、四五十間ばかりへだたりたらしむ、右も、左も、草生ひ茂り、僅に、一すぢの通路あるのみ。堂の後には、數かぎりもなき石塔、たちならびたり。その中に、新佛と見えて、ひとつの墓標立てり。前に手向けたる、拈梗女郎花などの、ぬれて見ゆるは、露か、はた、涙か。

寺をはなる、ほど遠からぬところに、櫛など賣る店あり。そこにやすめる一人の女、年齢十八九ばかり、容貌、極めて、うるはしく、着たる衣服はわかねど、上に黒き被布をまとへるは、縮緬にやあらむ。髪は、切髪にて、手に、水晶の珠數を持てり。老

婆は、茶をもてきて、「日毎の御墓参、なき人の御ためには、なによりの御ことならむ」といふ。かの女、「なき人は、知るか知らぬかわかねど、この世にながらふるかぎりには、かく菩提を弔はむ心なり」といふ。そのことばには、世の妻たるものが、夫に對する情といふ情は、ことごとくこもれり。老婆去りぬ。女は、縁に腰うちかけて、なにかもの思ひ居るさまなりしが、ふと息つきて、「まだ四十九日もたさざるに、昨夜の如き談ははじまれり。二夫にまみえずともへばこそ、かく髪ざりたるに」といふ。老婆、また、出てきぬ。老いたる人のならひ、世の常なきなど、かたりつけしが、そをさくほどに、時もうつりたらむ、野寺の鐘の聲、遙にひびきわたりぬ。女は、うち驚きて、歸途につきぬ。折しも、空高く、やまがらす寡鶉の鳴き行くあり。その聲のあはれさは、かの女ならては、また、誰か聞き知らむ。

その二

三條の小橋を過ぎ、三條の大橋を渡りて、左に折ること半町、鴨川の流にのぞみ

て、板屏をひきまはしたる家の見ゆるは、いかなる人の住所ならむ。最前より、客ありと見えて、玄關の前に、二輛の車、よこたはれり。車夫はまきりに、主人のかへりをまつさまなりしが、その一人、「この家のひとり娘花子といふは、たぐひまれなる美人なり。そなたは知れるか」といふに、他の一人、「まだまらず、さて、その美人は、いまだ婿なきか」といふに、「婿はありしかど、さき頃うせたり」。『あとの婿は、まだ定らずや』。「そのことよ、今日、われわれの主人の、こゝに來られたるは、大方、それがためならむ」。『さるにても、こゝは、なにといふ家なるか』。「坂谷茂樹とて、かくれなき歌よみの家なり。今の妻君は、後妻にて、女のためには、繼母なり。二三年前、主人はうせしのみならず、婿もあらねば、今は、その後妻が、なにもかも、心まかせになし居るならむ」など、互にうちさしやきて、そのはなし、いつはつ、へくもみえず。をりしも、女をのせたる一輛の車の、門にはしりいるあり。「ちかへり」の聲に應じて、あわたしげに、下女のいてきたれるをみれば、これやこゝの娘ならむ。車よりあるゝやがて、「客人にてもおはせしか」と問へば、「秋澤さまに、今一人おつれのかたあり」と答ふ。「なに秋澤氏が」といひて、まばし、考

ふるさまなりしが、他の車夫の居るに心づき、急に、奥にいりぬ。

床にかけたるは、夫の畫像ならむ。その前には、香爐と、花瓶とを据ゑたり。香のけぶり、たえたれど、花瓶の花は、うるはしくさきにほへり。そこよりすこしはなれて、東の窓のものに、一脚の机あり。その傍に、書棚あり。書棚の上には、源氏物語、枕草紙、または、種々の繪巻物を置き、机の上には、色紙短冊など、とりちらしたり。そこにいりて、座につくほどもなく、母のかたより、よびにおこせたり。御客は、秋澤氏といへば、また、昨夜のごときはなしならむ。ことに、他のつれの一人とは、彼がはなし、宮田氏、その人ならむ。こゝは、ゆくべきところにあらずとおもひて、よきやうに、下女して、ことわらしめたり。二たびも、三たびも、使あらむと、こゝろもこゝろならざりしが、その後は、よびにもおこせず。されど、夜ふくるまで、客はかへらず。女は、枕によりて、ひとり、涙に袖まぼるに、庭になくなる蟲の聲々、いとど、あはれをそへたり。

眞如の月につきて

おのが家は、駒籠なる吉祥寺の傍なり。奥の座敷よりは、石塔も、塔婆も、あらはに見ゆ。さるちかきところなれば、朝に、夕に、ゆきかよふに、おのづから、僧だちの顔なども見知りぬ。伊藤弘禪ぬしは、その僧だちの中にて、最も親しき友なり。ある日、たづねきて、「旃檀といふ雑誌をいださむと思へり。なにか文かきてよ」といふ。おのれ、佛者のことを知るものにあらず、さては、いなまむとも思ひしかど、かゝるところに住むも、かのいはゆる、なにかの縁因なるべければとて、まひて書きたるは、この「眞如の月」といふ文、これなり。おのれは、小説家にあらず、空想を書きたつるが如き、文才あるものにもあらず、なにを書くにも、見聞したることの他は、書くこと能はず。「眞如の月」の篇中、かきはじめたるも、この夏、丹波にゆきて、観音山のふもととなる、庵室にあひ見し、尼の實歴に外ならざるなり。過日、尼の傳記中、おぼつかなきところありしかば、丹波なる友人のもとへ、問ひやりしに、

今に、返書に接せず。その返書をまちて、次號より、かきつゞくることゝせむ。聞くところによれば、人は、はや、前號の文を見て、例のよしあしの批評をなせりとか。そのうち、ある批評家の批評といふを聞くに、嵯峨野の奥の古寺は、例の國文學者の口吻なりといへり。なるほど、今の人には、淺草の觀音あたりの裏店の山神のありさまを書き、その山神が、焼芋を食ひて屁をひりしが、その屁の色は、黄なりとか、紅なりとか、また、その屁の音は、たかしとか、ひくしとか、また、その屁のには、ひは、くさしとか、かぐはしとかいふかた、おもろしとも思ふならむ。されど、おのれは、さる俗なることは、書くを欲せざるのみならず、おのれの書かむとする尼は、實際、嵯峨野の古寺に關係あるをいかにかせむ。批評は、なにの批評を問はず、その道をすゝむるためには、こよなきものなり。されど、批評せむとするには、その全體を見たる上にて、なす、べきなり。頭のみ見て、その屁を批評するが如き、蓋し、その常を得ること難からむ。おのれは、この點において、常に、今の批評家といふものゝ、輕卒なるを、歎くものなり。かくて、わるくのみいふ人ばかりかと思へば、京都なる友よりは、左の歌を、おくり來れり。

世をいとふこゝろの月の影までも

さやかにやどす水ぐさのあと

こはまた、あまり、身に過ぎたる評にて、敢て當るべくもおぼえず。ともかくも、書きはじめたることなれば、他の批評はかへりみず、必ず、その結末までを志るさむと思へど、佛者の事にくらさおのれ、果して、尼のこゝろを書き得るや否や、はかられず。幸に、弘禪ぬしをはじめ、あまたの僧たち、近きにあるあり。教をうけて、つぎつぎ筆とらむ。讀者、これを諒せよ。

日本文學全書の跋

われわれ、不肖をかへりみず、國文學の不振を歎き、夙に、これを興隆せむを以て、志とせり。國文學の不振の原因、種々あるなかに、そのおもなるものは、たまたま、教授の方法、そのよろしきを得ざると、國文に關したる書籍の、すくなきことによれりしなり。さては、この學のため、一方に於ては、教授の方法を研究し、また、一

方に於ては、書籍の出版をはからざるべからずとは、明治十八九年ころにあたりて、われわれのいだけの考にてありしなり。この文學全書は、その考によりて、起したる一事業にして、これを出版せしは、實に、明治二十三の春にてありしなり。今日まで、年をかぞふれば、三年にまたがり、月をかぞふれば廿五箇月、日をかぞふれば七百六十餘日なり。この間、一日もやすむことなく、毎月一回、必ず、一冊を出版し來れり。

そもそも、われわれの、この書を出版せむとせし時は、國文學は、實に、衰微の際にて、これを論ずるも、これを辯ずるも、人のこれを聞くことなきのみならず、わが國文に關したる書籍の如き、手にとるものだになかりしなり。世は、かくの如きありさまなり。文學全書を出版せむと試むるも、利にのみ汲々たる、書肆の常として、人の、これに應ずるものなし。この時にあたり、われわれのかなしき、實に、いふべからざるものありしなり。

さりとて、すておくべきにあらずれば、とかく奔走しつるに、幸なるかな、博文館主その人あり。大に、われわれの舉を賛成し、遂に、われわれの希望の如く、出版す

ることを諾へり。この時にあたり、われわれのよろこび、實に、いふべからざるものありしなり。

文學全書、一たび出て、これを購ふもの、常に、萬にくならず、それと同時に、國文學のありさま、日に月に、興隆するにいたれり。國文學の今日あるをいたし、は、この出版にもとづけるものとは、いはずといへども、また、その間にありて、大に、力ありしは、われわれの自信するところなり。

文學全書の、好評ありしや、これに類似の書、あまた出でたり。されど、その類似の書は、ことごとく、その終を全うせしか。二三冊にてやめたるもあらむ。五六冊にてやめたるもあらむ。こまかに見てもゆけば、その終を全うせしもの、ほとほとなきが如し。われわれは、自らほこるにはあらざれど、その編、實に、二十四、それらをさめたる書類、實に、三十八部、その丁數、實に、一萬六千五百餘頁にいたれり。こは、皆、博文館主の、熱心と、勉強とに、もとづけるものにして、その義のあるところ、われわれも、長くわすること能はざるなり。

今や、わが文學全書は、豫期の如く、二十四編に達したり。こゝに、一まつ、完結をつ

げむとす。この完結に際し、跋文は、小中村兄のかくべき約なりしが、風のこゝちにてはたさず。萩野兄にたのみしに、おなじく風のこゝちにてかなはず。こゝに、二兄にかはり、拙筆とりて、一言するにまじむ。明治廿五年三月廿五日、落合直文。

梅嶺畫譜の序

余等兄弟、をさなき時、父君より、一の書院を興へられ、日夜、そこにあつまりて、書をよめり。床に、一幅の軸かゝれり。こは、父君が、京都に行き給ひし時、幸野梅嶺して、かゝしめられたるものなりといふ。梅樹あり。そのかたち、龍のごとし。書、やゝふくらみたれど、いまだ綻びず。枝上、雪ふりかゝれるに、風さへふきたちて、時ならぬ花のちりみだれるところ、眞にせまれり。一日、父君、出てき給ひて、汝ら、こを見よ。梅は、百花のなきがけをなすものなり。されど、幾多の風雪を、凌がさるべからず。汝らも、苦學して後にこそ、名も成すべけれとのたまへり。余ら、をさなき心にも、げに、なることと思へり。父君、今は、世にまはせず。われら、

いまだ、名をなさず。されど、父君の、御教をわすれぬと共に、梅嶺のこの梅は、われらの脳に、かたく印して、まばらくもはなれず。繪畫の、人心に關係ある、おびたどしといふべからむ。ことし、京都にゆきて、梅嶺の墓を弔ひしが、かへりきて、いくほどもなきに、この梅嶺の畫譜の序を、かくことゝなれり。余と梅嶺とは、いかなる縁のあるにかあらむ。

林子平命百年祭及三好清 房贈位祝祭詞

年の内に、月はあれども、月の内に、日はあれども、今年の二月の十まり一日を、生日の足日と撰み定めて、内日刺これの都の、芝の公園地なる、彌生社やよひやの奥の小床を、殿の石境と掃ひ清めて、奥山に生ひ立てる、五百枝榊を手折り持ち來て、玉串と刺し立て、神籬と祝ひ立て、こゝに、林子平友直主の命の、神靈を招き奉り、坐せまつりて、稱言竟へ奉らむ。

汝命は、越智刑部大輔通高主の御裔、從五位下大炊頭良通主の御子に坐して、元文三年といへるに、この江戸に生れ給ひぬ。御性、敏く賢く、生ひ立ち給へるまにまに、學の業を好ませ、御年、十まり九年の時ばかり、陸奥なる仙臺に生みつき給ひぬ。それより、國を思ひ、世を憂ひ給へる御志、深く厚く、西は、不知火の筑紫の果より、東は、蝦夷が住む、千島の奥に至るまで、普く、見巡り給ひ、かくて、千萬の事に業に、御身を盡し、御心を碎き給ひ、そのをりをりに、書きまゐるし給へる書ども、いと多かり。ことに、海國兵談、三國通覽など、世に聞えたり。この二書は、汝命の、最も、御心を用ゐさせ給ひしものにして、海國兵談は、外國の寇を防ぎ、三國通覽は、國の版圖をひろめ給はむための、み思ひおこしなり。海國兵談の後に、「傳へてはわが日本の兵の法の花さけ五百年の後」といふ御歌を、記し附け給ひき。その深く思ひ、遠く考へ給ひし御心のほど、誰か、まぬび奉らぬものあらむ。また、誰か、慕ひ奉らぬものあらむ。然はあれど、憂世のさがのすべなきに、その高く廣く茂く太き御心を、知るものなく、なかなか、江戸の幕府の怒りに觸れさせ給ひ、その書は、いふも更なり、彫版さへに焼き捨てられ、剩さへ、國の守の君に命せて、

終に、汝命を、夜半の嵐なす召し上げ、天塞る黒雲なす、召し籠めさせ給へるこそ、悲しき事の極にはありけれ。かの「親もなし妻なし子なし版木なし金もなければ死にたくもなし」と歌ひたまひて、御自ら、六無齋と名のらせ給ひしも、この時とぞ聞えし。あはれあはれ、この御歌をききて、誰か泣かざるものあらむ、また、誰か、袖まぼらざるものあらむ。かくて、汝命は、憂雲の晴るゝ暇なく、終に、寛政の五年といふ年の、六月の二十日あまり一日といふ日、御年五十あまり六年といふに、はかなくも、朝の露と消えさせ給ひてけり。あな悔しきかも、あな痛ましきかも、悔しといへども、言葉足らず、痛ましといへども、情残り。あはれ悔しきかも、あはれ痛ましきかも。かくて、文化の四年といふに至り、汝命の憂へ諫められし、御意に違はず、北の海に、外國の寇ども、侵し來れり。汝命、身まかり給ひて後、いくばくの年も経ざるに、かゝる事どもありしかば、人、皆、汝命の思ひはかりのまゐるきに、驚かぬものとはなかりけり。その後、あまたの年を経て、嘉永六年といふ年、米國の使節、浦賀の海に入り來れり。汝命、身まかり給ひて後、五十年ばかりにして、またまた、かゝる事どもありしかば、世の人、いよいよ、汝命の思ひ

はかりのあたれるに、感^{かま}けぬものとはなかりけり。これより、年に、月に、汝命の御名は、世にかくれなく、かの故郷なる青葉の山の彌高く、廣瀬の川の彌廣く、響きわたり、輝きわたり、殊に、國の守の君よりは、前哲といふ詞を進らせ、汝命のために、碑文を建てられ、今の明治の大御代となりては、かしこくも、朝廷より、正五位を贈らせ給ふ。かくて、經行く月日は、行く水の淀みなく、今年はしも、はや、百年にぞなりにける。故、今、宮城縣の人々、うち群れ、うち集ひ、汝命の爲に御祭仕へ奉らまくと、神靈の御前に、御食御酒をはじめ、海川山野のくさぐさの物を、横山の如く置き足らはして、供へ奉らくを、平けく安らけく、旨らに聞し食し給ひて、今も、往前も、天翔り、皇御國を、常磐に平けく安らけく、夜の守日の守に、守り給へ幸へ給へと、畏み畏みも白す。

言別さて、三好監物清房主の命の神靈も、暫時、共に、この所に招き奉り、坐せ奉りて、稱言竟へ奉らく、汝命は、世に在し、時、國の爲に、心を盡し、身を盡しまし、を、雲井に高く聞え上げて、前つ年、厚く、勞ひ譽めさせ給ひしに、此般、また、正五位を贈らせ給へるは、いと愛たく、嬉しき事にしあれば、そのよし、汝命に聞

え奉らくと爲て、奉獻る種々の物を、平らけく、聞し食し給へと白す。

勸工場

ちかごろ、觀工場といふもの、いたるところにたてられたり。なかにも、小川町の治集館といふは、最もふるく、また、最もさかりなりとかや。一夜、ふと、その前をすぎつれば、たちよりぬ。入口には、球燈をかけた、うちには電燈をつらねかけたれば、まひるのやうなり。もとより、なにを買はむにもあらねば、たゞ見てのみ、過ぎゆくに、人々、うちむらがりて、たやすくとほり得べくもあらず。花かざしなからへあるところには、少女ども、たちふさがり、小説賣るところには、書生むらがり。白髪染を買ふ姫あれば、花ふだをもとむる童もあり。ステッキに目をそぐは、壯士にて、香水に鼻うごめかすは、遊治郎なるべし。そも、人の心々なれば、とから評すべきにはあらず。さはいへ、妻は、役者の寫真に、夫は、百美人の寫真にみとるゝなどは、あまり、よろこばしきことにもあらざらむ。右に、左に、目をそぐ

つゝ、なほ、見もて行くに、茶碗、徳利、箸、膳、碗、楊枝、靴、手ぶくろなどよりはじめて、火鉢もあれば、巨燵もあり、カバンもあれば、シャツもあり。頭にかざすもの、手につくるもの、足にはくもの、腰にまとふもの、すべて、なに一つとして、備はらざるものなく、まことに、浴集といふ館の名にそむかず。こゝにても、そこにも、人あまたあつまりたるが、雑誌手にとり、大かた見終りて、買はずに出てゆくは、江戸子にや。手をふれしばかりにて、はやくうりつけられたるは、田舎ものによ。シヨールをまとへる令嬢、葉巻を口にする紳士、さし櫛として、ふみをらるゝ女あれば、足ふまれたりとして、つぶやくをの子あり。スリ用心の張札見て、今更のやうに心づきて、腰のあたりかいさぐり、はや煙草入すられてけりといふもあれば、錢をかぞへて、はじめて、ツリ錢のすくなさに心づきて、あわたしうあしもどすもあり。笑ふもの、泣くもの、怒るもの、千態萬狀、つたなき筆のちよぶかきりにあらず。人におされ、人をあし、歩むとはなした、ゆきすすぎて、いつしか、外のかたへ出てぬ。さて、こゝにははまほしきは、ならべあるものごもることなり。そのものうちにて、いかなる物がほく、また、いかなる物がすくなきか、また、

奢侈にかゝはれる物などはすくなきか、はた、まほきか。こまかに、こを思はむには、おのづから、世の人々の心のおもむくところも知られむ。ことに、あやしむべきは、勸工場のならひとして、入口のところには、金銀のまき繪、漆器、陶器など、うるはしきもの、みかざりつらねて、出口の方には、箒、櫛木、櫛鉢、はた、杓子、大火吹竹など、ならべおくことなり。こもまた、よそめをのみ心とする、今の世のまならむか。

岐阜の震災

さ夜ふけて、門を叩くものあり。起き出でて見しに、加藤まご子ぬしなり。いかなる用ありてにかといひしに、一昨日の地震にといひて、あとはいはず。いとらぶかしかければ、なほそのあとを尋ねしに、こたびの地震は、わが故郷の方、最も、はげしかりしよしなれば、直に、電信局にもものして、かの地のありさまを、問ひ試みむとせしかど、電線通ぜずなれば、いかにせむやうもあらず。その後、人々のうはさをさし

に、家といふ家はたふれ、人といふ人はうせたりとか。まことならむには、わが祖母、わが母なども、はや、世になき人ならむ。とにもかくにも、明日は、出て立たむと思ひはべり。そのこときこえまつらむとて、あどろかしまゐらせしなりといふ。そは、あはれなる御事どもなり。いかに、心せき給ふらむといひて、その夜は、そのままわかれぬ。

まさ子ぬしの父君は、はやくうせ給ひしよしにて、今、家にあるは、祖母君と、母君と、ほかに、姉君一人おはすのみなりとか。一昨年のお秋ばかり、もの學びのため、この東京にきたられ。常に、おのがもとにゆき、せられたり。その性、孝養ふかき人なり。地震ときし昨日今日、はた、今夜の心はいかにあらむ。三日へて、文ときぬ。その文に、

一番汽車にて、出て立ちぬ。常は、はやしと思ひつる車も、けふは、ことさらにあそきこしせられてなむ。午後四時すぎるころ、岡崎につきはべり。このときは、線路やぶれて通せず。ふより、人力車にもせむと思ひしが、人おほくて、車たらず。やむことをせず、こよひ、こゝにやどりぬ。

とあり。こは 岡崎よりあこせしものなり。次の日、また、文あり。

いそぎいそぎで、夕つ方、熱田につきはべり。日もくれかゝりたれば、宿からむと思へど、宿るべきところもなし。さては、これより、夜路をたどらむと思へり。くはしくは、あとより。

とあり。こは、熱田よりあこせしものなり。次の日、又、文あり。

名古屋につきはべりぬ。こゝのあたりのさまは、筆にも、紙にも、つくしがたし。家は、大かたくづれ、死人は、道のべによこたはれり。震動、なほ、やまず。火など、とところどころより起れり。親は、子をよび、子は、親をたづぬるなど、かの、方丈記のあはれを、こゝに見るこゝちす。金はあれども、食物なく、買ふものあれども、賣るものなく、いづこにも、飢ゑにさげぶ聲のみきこえて、まことに、地獄のちまたを行くがやうなり。祖母はいかに、母はいかにと、こを見るにつけても、心のみいそがれてなむ。

とあり。こは、名古屋よりあこせしものなり。六日ばかりへて、また、文あり。

岡崎よりまゐらせし文、熱田よりまゐらせし文、名古屋よりまゐらせし文、いづ

れも、御目にとまりしことならむ。からうじて、一昨夜、こゝにつきはべり。さて、美濃に入りしに、いづこも、震災にかゝらざるところなく、清洲、一宮、はた、大垣など、いふべくもなし。岐阜は、こたびの震災の中心にて、家といふ家のくづれざるはなく、くづれたる家といふ家の焼けざるはなく、見ゆるかぎりはたゞ、焼野の原なり。さて、廿八日のありさまをさくに、そのすさまじきこと、いふばかりなく、梁ちちて、うちひしがるゝものあれば、縁ぬけて、落ちいるものあり。内に入れば、火もえ出で、外に出づれば、地さげ、立たむとすれば、ゆるり休され、坐らむとすれば、はねかへざる。親はにげたれど、子は死に、子はたすかりたれど、親は見えず。夫のなきがらはそこに、妻の死骸はこゝにと、目には見ゆれど、そを救ふすべからず。一家こぞりて、死ぬるあれば、一家中、たゞ一人のをさな子のみ、残るもあり。死したる母とあらずして、乳ぶさにとりする縁子あれば、死したる子とあらずして、そを背負ひてにぐる母あり。子なる人のなきがらを抱きて、泣きさけぶ間に、ふたゝびゆり休されて、わが身も死ぬる親あり。祖母をたすけむとて、家にいりしに、その入りたる孫は、うちひしがれ

て、その祖母のみ残るあり。一人の死骸、ちぎれちぎれになりて、頭は、庭の方にとび、足は、屋のむねにかゝり、胴のみ、たる木の下にあるあり。目のとび出でたるは、驚きたりて、そをつかみ、腸の見ゆるには、鳥あつまれり。かゝるさまにて、なほ、一日に、二ゆり三ゆり、ゆらぬことなし。今夜も、また、いかなることあらむと、人々、やすきおもひなし。飢によへども、そを助くるものなく。雨に泣けども、そを見かへる人もなし。貴き人も、いやしき人も、皆、路傍にあつまりて、夜を泣きあかすさま、あはれといふも、かなしといふも、はかなしといふも、もの、數ならず。かくて、妻の家は、いかにといふに、くづれたるのみならず、焼けはてゝあともなし。あまりのことに、涙も出でず。祖母はいかに、母はいかにと思ひて、とはむとすれど、とふべき人もなし。伯母なる人の家は、いかにと、いとぎたづねしに、その家もなし。こはいかに、たゞ夢、まことに、夢路をたどるこゝちす。警官のめぐり來たるにあひつれば、心のうち、こまこまとのへて、祖母のありか、母のありかなどたづねしに、おのがあたりの人々は、こゝより西の方、その町の町に避けたりといふ。さては、そこにはするにこそとて、

また、いそぎにいそぎぬ。人々、あまたあつまれり。このむれか、かしこのむれかと、ともし火の見ゆるかぎり、尋ねさがしに、五六人席をまきて、居ならびたるあり。近づき見れば、姉の聲す。姉上とよびかけしに、姉は、うちどころきたるさまにて、こたへもせず。まばし、妾を見てありしが、そなたはまご子よといひて、はしりきて、妾を抱きぬ。姉上よ、姉上よ、祖母上には、母上には、いかにと、いひしに、その祖母上、その母上にはといひて、泣き出しぬ。その時の妾の心は、いかにありけむ。そこに泣きふしたるま、まばし、ものもあぼえず、なほ、くはしう問へば、その朝、祖母は、寺に参りてありしが、その寺くづれて、このま、他界の人となり、母は、二階の掃除し終へて、階をくだらむとする時、ふるひ落されて、やがて、はかなうなりしなりとぞ。かゝるあそろしのさまを聞くにつけても、いかなる前世の悪業ならむと、そらろに、罪ふかうあもはれは入り。あはれともあぼしめせ。さて、その夜は、その席に寝ぬ。明くる日、姉と共に、まゐる人をたづね出でて、今日までは、こゝにはべり。この家とても、なかばくづれて、家のうちにはものもあらず。今夜、姉には、祖母と母との名をまゐりして、そ

を柱にはりつけ、その下に、燈明と花とを手向けたり。その燈蓋はいかに、かけそこねたる小皿なり。花瓶はいかに、こも、口のあらぬ徳利なり。燈火はくらく、花、また、色もなし。そのくらし燈火をたのみ、その徳利の水をそそぎて、この

文は、また、めはべり。こまかなることは、なにも推したまへ。とあり。あはれ、この文は、こたびの震災の一部分にすぎざらむ。されど、そのありさまの、いかにありしかを知るには、あまりあらむ。明治廿四年十一月七日の夜、小中村博士のもとにて、文章會あり。そのれ、題を探りしに、岐阜の震災といふ題を得たり。かの地の震災は、そのれ、行きて見ざれば、知るによしなし。さては、この文をかゝけて、今夜のせめをふさぐになむ。

騎馬旅行序

そのれ、この歌をよまむとて、筆とりはじめしは、六月廿三日の午前十時、よみ終へしは、その二十六日の午前三時なり。日数は、四日に跨れりといへども、その時

間を數ふれば、僅に、六十五時間に過ぎず。筆とりはじめたる前夜、即ち、廿三日の夜、學友五六名、訪ひきぬ。談、たまたま、福島中佐のことに及ぶ。一人、おのれに向ひて、中佐のために、長歌をよみてはいかにといふ。日もせまりたる今日、とても、よみ得べきにあらねば、なにとも答へせず。その夜、床につきしに、枕頭、偕行社記事あり。よみもて行くに、中佐の旅行のことども、詳に載せたり。おのれ、欽慕の情おこりてやまず。おろかにも、この歌よまむと思ひたちたり。あくる日、學の弟與謝野寛、家の弟鮎貝盛影の二人にはかるに、共に助けむといふ。そのをりもののがよろこびは、いかに。かの中佐が凱旋、烏羅兒の良馬を得たる折のこゝちにも、或はまさりたらむか。その日午前十時、三人うちよりて、筆をとりそめぬ。晝食たうへたる他は、机をはなれず。午後三時、大友明智の二氏とひ來ぬ。大かたの客は、病のよしいひてことわりしが、二氏は、日ごろより、こゝろやすき人々なれば、案内も乞はず、入り來れるなり。盛影は、なにくれと物語したれど、寛とおのれとは、なほ、机をはなれず。二氏のかへれるやがて、鹽井氏とひ來ぬ。こゝろやすき人なれば、ことばは、まじへたるものから、なほ、机をはなれず。次に

來れるは、前田氏なり。氏は、われわれの、まきりに、物かき居るを見、まばらば、歸らむとせしが、盛影、そをひきとめて、碁などうちはじめぬ。されど、われわれ二人は、なほ、机をはなれず。次に來れるは、關根氏なり。おのれ、はじめ、机をはなれ、氏とかたらふこと、二十分餘にして、氏はかへりぬ。このをり、寛と盛影とは、歐亞の境界の地理につき、まきりに、議論をなし居たり。やがて、日はくれぬ。夕食たうへて、また、机にむかふ。蚊いと多し。二人は、うちつぶやきて、蚊遣火などたくめり。中佐の騎馬旅行を思はむには、蚊のごとき、なにかあらむなど、いひはげましは、はげましけれど、おのれも、堪へがたうなりたれば、庭に出てぬ。青葉がくれ、出てくる月見ても、句のみ案せられて、まばしも忘れず。二人も、必ずや然りしならむ。蚊もをらずなりたりといへば、また、入りて、机にむかふ。夜ふくるまに、あつさきびしく、憎き蚊、また、むらがり來ぬ。はじめのほどは、扇などもて、うち拂ひしが、あまりうるさかりければ、蠟燭して、焼きそめたり、まこと、ハウチラムヤの一段は、この時をよめるなりける。その夜は、三人ねぶらず。あかつきがた、配達し來れる新聞紙五六葉、手にとりもちて、共に、庭

の芝生を散歩す。朝風のこゝろよきに、楓の若葉の露ちるなど、いと涼し。よみもてゆくに、この廿九日には、中佐歸京のよしあるしあり。日、いよいよせまれり。まばしき、愈るべきにあらずとて、また、書齋に入りぬ。午前七時三十分、國學院にさる心なりしかど、同院は、試験の當日なれば、行きつるになむ。八時より十時まで、二時間。それすませて、かへりぬ。汗もふさあへぬに、また、机に向ひ、車上にて、案出せる句など、書きまゐるす。二人は、おひが歸れるも知らず、寝てあり。昨夜の疲れを知らば、おこしもせず。晝食たうべて、また、國學院にもものす、午後一時より午後三時まで、二時間、試験すませて歸りぬ。山田、藤井、福田、見田、櫻井、遠藤などの諸氏、尋ね來りしよしにて、名刺ども、机上に散れり。そを見てあるに、太田氏、尋ね來ぬ、明日、ふるさとへかへらむほどに、歌ものしてよとて、あまたの短冊とりいだしたり。そを認むるために、三十分をつひやせり。それかへしたるに、また、二人の客の訪ふあり。香取、伊藤の二氏なり。遠きところより來れるなれば、迎へ入れぬ。それにも、二十分ばかりや、つひやしたらむ。ほどなく、

日はくれぬ、こよひは、昨夜の蚊にこりて、早くより、戸などさしかためたるも、をかし。鹽井氏、こよひも訪ひ來りしが、たゞちにかへりぬ。今日は、客のために、試験のために、いたく妨げられしかば、夜に入りて、そをとりかへさむと、机にむかふをりしも、井上氏外二名、同行にて、訪ひ來ぬ。井上氏は、新體詩に、熱心なる人なり。福島中佐の歌よみてあるよし語るに、よろこぶことかぎりなし。三氏、かへりて後、また、勝田、村岡、桑島氏など、前後に、訪ひきぬ。なにくれと、話してあるに、桑島氏、杜鵑のこゑすといふ。耳をそばだつるに、更に、こゑせず。それぞといひ、あらずといひて、議論やまず。おのれは、その議論を、寛と盛影との二人にゆづりて、また、机に向ふ。やがて、三氏はかへりぬ、時計を見れば、はや、十一時なり。こよひも、また、皆、いねず。あくる日は、日曜日なり。國語傳習所、國文研究會、文章專修會、みな、休みぬ。その他、集會も、五つばかりありしが、その中、同文會、この文會、白眼會など、行かねばならぬところすら、ことわりたり。午前九時、三人うちつれて、湯にもものす。道に、植木屋にたちよりて、女郎花をもとむ。まこと、アムへ行くところの道の邊の、七草の一段は、このかへるさに、よみいでたるなり

けり。晝つ方、義勇會員佐藤氏、訪ひ來ぬ。あるやむごとなき人の添書など、もて來りしかば、迎へ入れぬ。來月の會には、演説せよといふ。これに、二十分ばかりもつひやせり。夕つ方、神田區教育會員多田氏、訪ひきぬ。これも、來月の會に演説せよといふ。これにも、二十分ばかりつひやせり。夜に入りて、小杉、柿沼の二氏、訪ひきぬ。二氏は、日光の人なるが、かしこに、夏期の講習會を催さむとて、おのれの臨席を、乞ひに來れるなり。大日本教育會に出てむの前約あれば、行かれずといひしに、さらば、誰か、その代理を見いでくれよなど、種々、入りくみたる物語して、一時間ばかりをつひやせり。その人々、かへりて後、やがて、門をどぢたりしに、まばしありて、また、そを叩く音す。誰ならむと思へば、杉浦氏なり。十分ばかりありて、かへりぬ。こよひ、書記生二人をやとふ。われわれ三人と、書記生二人と、あはせて五人、狭き書齋にとぢこもりぬ。連夜の徹夜に、蚊を防ぐすべなど、やゝ研究せしかば、一夜は、一夜より、少くなりたり。庭前に、ひとつの螢、とひ來ぬ。それをとらむと、追ひゆきしに、櫻の木末にとまれり。竿などもちて、そを追ひしに、また立ちて、門の方へとび行きぬ。あなたさまにまはれ、かしこにめ

ぐれなど、五人うちつれて、追ひまどふ。つひに、隣の垣をこえて、遠くとび行きぬ。昨夜の杜鵑、今夜の螢、風流のために、徒に、時をつひやしなど、あのが身のなせる怠、また、たれをか恨みむ。こゝに、滿洲にかゝれるに、あもしろき材料なし。諸新聞を見るも、諸雑誌を見るも、何事も記しおかず。いかにせむなど語りあへど、かひなし。この歌、われわれのこゝろにも、あもしろからぬところどころ、極めてあほかり。されど、この滿洲ほど、あもしろからぬところなし。さはいへ、あもしろきところよりも、あもしろからぬところは、ひときは、われわれのこゝろをいためた。り。夜半、すこしすぎるほど、窓おしあけてながむるに、星の光きらきらし。ウラル山の段の結末の句、「空ふく風にねぞめして、あゝ露白き岩の上、ねながら見れば枕邊に、近く見えけり月の影」とありしを、こゝに至り、「影いと近し北極星」とあらためたり。この句を得たる折のわがこゝろ、二人ならでは、誰か知らむ。夜の、やうやう、明けむとする頃、またく、よみ終へぬ。その草稿どもを、書記生に委ねて、われら三人は、ねぶりにつきぬ。わが夢、なほ、アルタイ山あたりに迷へり。二人の夢も、必ず、然りしならむ。目ざめたるは、九時三十分ごろにもやあらむ。この日、

かねて、約束したる歌舞伎座にもむきぬ。道にて、夢の段の句調よろしからぬところ、二つ三つころづきたれば、そを書きまゐりて、二人の許へおくりぬ。かくて、茶屋に行き、茶をのみて、入場せしに、歌のみ、ころにかゝりて、よくも見やらず。たゞ、齋藤内藏之助利三が、愛馬に別るところに至り、中佐が、凱旋に別れし時のこと、思ひいだされて、覺えず、袖まぼりたり。夜に入りて、家にかへりしに、清書も、またく終へたり。三人うちよりて、こを讀み試みたるこゝち、拙き筆には、盡しがたし。あはれ、三日三夜の、われわれのくるしみは、いふべくもあらざりき。されど、中佐の騎馬旅行にくらべなば、一日、否、一時間のくるしみにも、ちよばざらむ。

明治二十六年六月二十六日、福島中佐歸京の前三日の夜、くらき燈火のもとにて、萩の家の主人落合直文まゐるす。

東西南北の序

京都の地たる、山うるはしく、水明かなり。そこに住むものは、おのづから、歌よむ情の起るべし。與謝野鐵幹は、京都の人なり。歌にたくみなるはその故にや。鐵幹は、わが淺香社の社友なり。社友、三十人前後、いづれも、その歌に、一種の特色を備へ居るが、鐵幹のごときは、雄々しき調を以てまゐるものか。鐵幹、このごろ、歌集を出さむとて、そのはじめに、余の歌論をまゐるさむことをもとむ。余の歌論は、鐵幹の、よく知るところ。今、あらためて、なにをかいほむ。たゞ、いはまほしきは、桂川と鴨川と、いづれか、雅にして、いづれか、俗なるといふことなり。また、東山と嵐山と、いづれか優にして、いづれか拙なるといふことなり。鐵幹、よく知らむ。桂川は、水聲清くして、影をひたせる月、また、をかしきにあらずや。これに反して、鴨川の、ひなびたる景色はいかに。嵐山は、松ふく風すしくして、ふりくる雨、また、ちもしろきにあらずや。これに反して、東山の、いやしげなるながめはいかに。今の世の、新體詩とかいふものを見るに、鴨川のほとりに、戀歌の聲を、さくが如く、また、東山のふもとに、洋燈の光を見るが如くなるにあらずや。余は、鴨川と東山との、ひなびたるけしき、いやしげなるながめなることは、はやく認め

たり。水を愛せむには、桂川、山を賞せむには、あらし山といふことをば、はやく見たりたり。鐵幹も、また、これに對しては、異議なからむ。さはいへ、桂川にむかひて、驚浪、龍門を下る勢をもとめらるべきか、嵐山にむかひて、峻岾、晴空に聳ゆる姿をもとめらるべきか。そは、また、白河と比叡の山とのあるにあらずや。鐵幹の歌を見るに、桂川、あらし山は、見終りて、深く、白河にさかのぼり、たかく、比叡の山にのぼらむとするもの、如し。その志、壯とやいはむ、快とやいはむ。余、この夏、ぬしの故郷なる京都に遊び、白河に、比叡の山に、暑さを避けむとす。鐵幹、歌集の出づるをまち、そを携へて、來り訪へ。洶水激するあたり、白雲深きところ、腕を把りて、歌論をなすも、また、一快事ならずや。明治二十九年七月六日の夕つかた。

一月一日國文編輯者にわくる文

新年のよごと、ほろこきはへり。さて、本年國文の初ずりには、年のはじめにか

かはれる消息文どもを、載せ給はむの御ころなりとか。きはめて、ちもしろき事どもに侍らむ。小生にも、さる文あらば、寄稿せよとのこと、身にあまりたるおほせごとになむ。新年の消息文は、年ごとにかきかはしつゝあるものから、心とめたるものしたる文としては、一文もはへらず。ここに、消息文につき、日ごろ思ひ居りつることどもをかきて、いかに、その責をよさきはへらむ。そもそも、今の消息文は、みくさにわかれば、へり。その一は、御座候文。その二は、新年ヲ迎ヘッ、ソシテ文。その三は、思う給ふる文。御座候文は、どぶろくの如く、新年ヲ迎ヘッ、ソシテ文は、ビールビールの如し。思う給ふる文は、正宗のごとし。どぶろく、もとより、あしからず。されど、年のはじめに、そのうちに、屠蘇とろすいれて、のませられむには、いかゞはへらむ。ビール、もとより、あしからず。されど、それはた、屠蘇とろすいれて、のませられむには、いかゞはへらむ。椀わんにも、コップこっぷにも、飲むことは、かなひがたしや。どぶろくの屠蘇とろすにては、その重詰のうちも、ちしはかられぬへし。大根漬か、はた、ラッキョらっきょ漬か。その不風流、いかにぞや。ビールビールの屠蘇とろすにては、これこれはた、牛肉か、バターか。その殺風景、また、いかにぞや。共に、小生のきらふところ

にはべり。かくて正宗の屠蘇はいかに。こは、むかしながらのならばしにて、小生などの、最も、このむところにはべり。かの數の子、田作、養豆など、いと、うれしう、思ひはべり。なるか、ならぬか、わかぬども、新年の御馳走は、さるかたに、さだめまほしうこそ。たゞ、正宗を好むやからに、一の僻あり。蘇屠はちもしろからず、それよりは、白散のかた、をかしからむ。田作はをかしからず、それよりは、なよしのかた、ちもしろからむ。銚子はちもしろからず、かめのかた、をかしからむ。三重の杯はをかしからず、かはらけのかた、ちもしろからむなど、いひあへり。椀、コップにくらぶれば、徳利、フランクにくらぶれば、大根漬、ラッキョ漬にくらぶれば、牛肉、バターにくらぶれば、ちもしろくもはべらむ、をかしくもはべらむ。されど、そはまた、あまり古代めきて、物好の評や、うけはべらむ。小生は、好みはべらず。さてまた、男子の消息文と、女子の消息文と、ひとしなみにせばやといふ論、折聞えはべるが、そは、なしうべからざるごと、なしうるも、よろこばしからざる事とは、小生が持論にはべり。男子は男子、女子は女子、その性、ちなじからざるかぎりは、その文も、ことなるは、ちのづからなる理にやはべらむ。女子の、羽子つくを

見給へ。いとみやびやかなれど、こをして、獨樂をまはさしめむか、そのさま、いかかはべらむ。男子の、風をあぐるを見給へ。いとさましかれど、これをして、鞠をつかしめむか、そのさま、いかにべらむ。こは、君たちも、御同論ならむと、思ひはべり。この外、消息文につきて、まごをまほしきことども、あまたはべれど、まめ繩の、ながうのみなりて、なかなか、無禮にもやなりはべらむ。藪柑子のこうじて、さいふとなほほしそ。こゝのべむは、権の實の、いとかやしけれど、裏白の、またうらわかき論、かち栗の、例のくう言に過ぎざるを、いかにかきはべらむ。橙の、いとたいだいしきやうなれど、そは、ゆづり葉の、他日にゆづりはべらむ。海老じもの腰うちかため、かしくみてまをす。

村雨日記

ちのれ、ものまなびのため、神宮教院にいらりてより、四年にもなりぬれば、いかで、ひとたび、東京にもせむものと、ことしのはじめつかたより、ちもひはせぬ。それ

ど、去年の冬、重き病にかゝり、身、いたく、やせ衰へしかば、人々にもとどめられ、父母にもゆるされざれば、まひても、いで立ちがたくて、たゆたひつゝあるほどに、はやくも、秋のころとぞなりにける。朝夕の風のすゞしさに、こゝちも、いとようなりにたれば、そのよしを、そのすぢにこひけるに、こともなうゆるされたり。さて、出て立たむ日をば、あらかじめ、九月の廿八日とさだめつ。をりしも、三好清徳、ことありて、教院にきてありければ、共に出て立たむと、ちぎらぶく。はやくも、その日とはなりぬ。朝とく起きて、太神宮に詣つ。道にて、

今よりは隅田川原の月をみて神路の山の秋をまのばむ

朝夕にくみしいすゞの川水をいつかへりきて又むすぶらむ。人々、おのもおのも、文を作り、あるは、うたなどよみておくる。堀秀成翁のうた、

老いぬれどいさのまつ原まちてあらむ君を雲井にあふぎみるまで

飛驒たくみよき手ををらへ大國のはしらとならむ末ぞみえたる。かくて、父母にも、わかれをつげなどして、午前十一時ばかり、門をいつ。おなじまどの友だち、八十人ばかり見送りて、あひの山にいたるに、阪梨雄三、馬場家房の二人、先づ日より、

いたはるところありて、病床にありしを、今日は、おのれを送らむとて、まひてまにけるを、こゝち、とみに、あしうなりぬとて、こゝにてわかる。

君にまたあひの山てふ名のみこそわかれて後のたのみなりけれ。さて、日ごろ、大風ふきすすむ、雨さへふりつゞきて、一日も、はれたる日はあらざりしに、今日は、日も、うらうらとてりわたり、そら、いとようはれぬ。宮川にいたるに、水かさ、いたくまさり、橋も、あとなくなかれ、堤なども、ところどころされたり。こゝにて、人々にわかる。黒岩頼司、高田猛、石森和男、河村常造の四人、松阪まで、送りまわらせむなどいふ。かたくいなめども、さかて、船に入る。はや、岸につきぬるに、あとなる人々、かへりもやらで、向のかたより、聲たからかにはりあげて、よぶもあり、まねぐもあり。おのれらも、聲のかぎりよぶ。こゝより、馬車にのる。新茶屋をすぐるころ、雨ふりく。されど、駒にまかせたれば、さのみ、くるしともおぼえず。二時ばかり、齋宮驛にかゝる。

里の名になほのこりけりいにしへのいつきの宮のあとをまらねど。櫛田橋を渡るぞろ、雨あとなくはる。川のながれなど、末かけて見渡すに、ながめ、いとちもし

ろし。

都人とはどかたらむをとめ子がさすやくし田の川のけしきを。四時ばかり、松阪なる山本屋につく。學の友なる坂正臣、渡邊功の二人、布教のため、はやくより、こゝにきて、やどりをるよしき、ければ、おのれらも、今宵、やどりになむ。こゝにて、

三日月をけふみそめけり望の夜の月はいづこの里にながめむ。叶真吉などといひく。なにくれと、さ夜ふくまで、ものがたりす。

廿九日、天氣よし。人々、山室山に詣てむなどいふ。おのれも、はかまなどとうてそのころがまへす。なにくれとものするうち、はや、九時のころともなりぬ。さらばと、いそぎて宿を出づ。十二時ばかり、ふもとにいたりぬ。このわたり、谷川のながれ、いと清し。

くみさらばふかきころもみえぬべし山室山の下に下水。かくて、のぼり行くに、坂いとあかし。からうじて、み墓のもとにきつきぬ。人々、酒魚などとりいでて、み前にさぐ。おのれも、ふもとにて、とりえたる葺、あるは、栗などたてま

つりつ。

なかなかめづらしとこそみますらめ山ぢのきめぢ谷のきは栗。さて、この山は、本居翁のこの世にはしほどより、いとよろしき山とほめはやされ、おのがうせにし後は、なきがらを、この山に葬るべしとまで、いひのこされし山にしあれば、そのながめ、いふへうもなし。

春は花秋はもみぢのをりをりにながめつきせぬ山室の山。人々、つゝみより、筆紙などとりいづ。さだめて、よきうたなども、よみいでぬへしとちもふに、更に、よみいてたるものなし。平田翁のうたに、「つかの間もわすれずあればけふことにまのびまをさむことのはもなし」とよまれけりとぞ。けふこゝに、つどへる人々も、みな、かゝるころにや。かくて、おのもちのものも、みはかのもとによりきて、遠きむかしをまのびつゝ、なにくれとものがたるに、雨、にはかにふりく。

いにしへをまのぶなみだの袖の上にいやふりまざる秋の村雨。いそぎて、坂をくだる。雨、猶、やまねば、妙樂寺に立ちよる。こゝは、翁のみはかあづかれる寺なり。こゝにて、雨のはるゝを待つに、あるじの僧、帖をもてきて、これになにかものせ

よなどいふ。おのれ、とりみるに、この山に詣てこし人々、やまとうた、詩など、
まゐりてありけり。人々、おのもおのも、おもふころをよみて、かいつく。おの
れも、その末に、

紅葉のほふあたりはわけいらむ山室山はよしふかくとも。雨もやみたれば、そ
こを立ちいでてゆく。このわたり、なべて、田のみなれば、おしねの上に、おきそ
へたる露など、吹く風にみだるゝさま、えもいはず。道のほとりに、桔梗咲けり。
おのれ、たをりて、人々にみす。俗びたる花なりなどいひて、めづる人もなし。
あだにのみ君ながめそ色ならてふかさこころもありのひふさを。四時ばかり、
もとのやどにかへりつく。今宵、雨いたくふる。

三十日、朝、とくおきぬ。雨、やまず。人々にわかれをつげむとて、
袖ぬらすこのわかれぢのころをばそらにもまゐるや秋のむら雨。人々、雨のやむ
をまちてよなどいふ。おれど、いしやむへくもあらねば、車にて、出て立つ。人
人、門まで、おくりいでつれど、時のまにみえずなりぬ。おもふことも、いふことも
あめれど、かひなし。

いとがむとのりはのれども小車のはやきをけふはうらみこそやれ。六軒驛などへ
て、雲津川にかゝるころ、雨やむ。津にいらて、結城宗廣朝臣のみはか拜む。この
さみ、暴風のために、み船ふきやられ、そのみ志も、とげ給はず。このところにて、
病にかゝり、むなしくうせ給ひしかば、そのかみのおもひやられて、こころ、そご
ろにかなし。

昔の下に今もかなしとさ、まさむ音ものすごさいせの浦波。川口常文をとひける
に、をりあしう留守なれば、なにくれのものどもおもひのこして、門をいづ。岩田
橋のもとなる喜早定徳をとふ。ねもごろに、もちひなどあるじまぬ。またはやけれ
ど、今日は、いさゝかことありて、東町に、宿をさだむ。宿の名を、村田屋とぞいふ。
こよひ、三好と共に、中内樸堂翁をとぶらひ、さ夜ふくるまで、なにくれものが
たりしつ。午後十二時ばかり、宿にかへる。

十月一日、そら、うるはしうはれたり。けふは、車にていそぐ。風、いとさむし。
たびなれぬまゐるしなるらむなにとなく衣手さむし今朝の秋風。江戸橋などわた
り、津をいづ。こゝより、人家も、ところどころになりぬ。さて、このわたり、め

ての方には、松原立ちつらき、ゆてのかたには、美濃尾張あたりの山、雲の上こそ
びをなどして、そのながめ、いひをらすよし。

後はいさかゝるけしきをみる時は旅をうしともおもはぢりけり」。とら。Sとのど
かなれば、春のこゝちやまけむ、雲雀の聲するも、いとをかし。

あのが鳴く時をもまたて秋の日をなに、ひばりの聲たてつらむ」。三好、このうた
をみて、今の世に、時をもあらで、聲たつるもの、このひばりのみならむやはなど
いふ。時にとりて、いみじうなむ。十一時ばかり、白子驛をすぐ。けふは、いかな
る日にか、Sづこの里にても、神のみまつりあり。玉垣の里なる八垣神社のみまつ
りなりき。ことにうるはしく、神樂つかふるさまも、なにとなく、ふるめきてみ
えたり。

あづから神代の手ぶりみえにけり神樂つかふる玉垣の里」。さて、先つ日の大
風、このわたりも、はげしかりけむ、並木の松、道のほとりには、あまたたふれてみ
ゆ。高岡驛より、車をおりてあゆむ。驛の中ほどに、高岡神社とて、社殿まします。
こは、式内のみやしろのよしなれど、いたくあつろへさせてみゆ。こたび、ところ

どころに、式内のみやしろを、みまぬらせしかど、いづれも、宮居やれくづれて、
をろがみまつるだに、ものうきほどなりけるに、かへりて、さなきみやしろのかた、
まさかりにみえたり。清水濱臣が杉田日記に、すへて、式内の社ども、あほかたは、
あともさだかならずなりはて、式外なるが、かへりて、さかえます多し。世のう
つろひ行くばかり、あはれにはかなきものはなかりけり。今にぎはふ宮居ども、
千とせの後は、いかにあはせむかしといひしも、おもひあはされて、いとゆゑし。
かくて、一時すぐるころ、四日市なる白木屋といふ宿につきぬ。こゝにて、ひるげ
ものして、船にのる。

こしかたにのこるけぶりをみても猶すゝろかなしきこの船ぢかな」。はじめのほど
は、風のふくともあほをさうしに、やゝあきになるまゝに、雨ふりいで、風のこゝ
ろも、あらびにあらびて、波、いと高し。いさゝけき舟路なれど、人々、みな急ひぬ。
そのさま、みるもあはれなり。午後四時ともあほしきころ、宮にはつ。雨もやみ、
風もなきぬれば、熱田の宮に詣つ。宮居、いと神さびたり。そのかみの事ども、は
るかにもあはれられて、なにとなく、立ちあがりたたくあほゆ。

かくばかり身をもおもはて世をいのるこゝろあつたの神やまゐらむ」。日もくれか
かりたれば、くるまをいそがせて、名古屋本町なる丸屋といふ宿につきぬ。今日は、
船にて、こゝちいとあしくなりにたれば、湯あみ、飯たうべなどして、はやくねつ。
今宵、琴の音をきいて、

ことの音の嬉しくもあるか家にありてきしにし宵のこゝちのみして
二日、天気よし。朝とくあきて、城など見にゆく。市中も、いとにぎにききうみえ
たり。こゝかしこみめぐりて、もとの宿にかへる。まばしありて、そこを出て立つ。
また、宮驛をすぎて、二時ばかり、鳴海にかゝる。このところ、すむしの名どこ
ろとかや。

父母にさかせてしがなすむし鳴海の野への夕ぐれの聲」。ゆくゆく、みわたす
に、田畑はさらなり、山も水も、いとゆたかにて、ならびなき國がらなりや。名所も、
あはくさこゆるを、ゆくゆくおもひつゝ、まどけなくもうたへるうた、
千年まできこえけるかな櫻田へ鳴きてわたりしあしたづの聲
みもやらてよそにのみわれすぎてけり音さし山のまとはまゝつゝ」。やがて、桶狭

間にいたりぬ。今川義元の墓みにゆく。さるに、道のわさがたきまで、草もひまげ
れり。その中に、はかなげに、ひとつの石たてり。表に、今川治部大輔義元墓と志
るしたり。うらにも、文字ありげなれど、苦むして、よみがたし。

たづねくる人のなみだかまら露のあさそふ苦の下のいしぶみ
かきみればむかしのあとも残りけり昔にうづみし野へのいしぶみ」。五時ばかり濱
松驛をすぎ。けふは、車にものらてきつれば、このわたりにて、日くれかゝる。

山がらす鳴きてねぐらにかへるなり今宵いづらにわれはやどらむ」。夕つぐる鐘
の、まこえければ、

たび人をやどれとまねくを薄のほのかにきこゆゆぐれのかね」。さ夜ふけて、ち
りふ驛なる山吹屋といふにやどる。この宿、いときたなし。されど、つとめてやど
る。今宵、ふるさとへ、ふみ出す。そのまゝに、

ふるさとをまのびこそやれ秋風に露もちりふの里にやどりて」。あ、それ、今宵、宿い
ときたなければ、こよなうつらしとあもひしに、昔は、たびするには、草枕とて、野
にも山にも、ふせりしものなるべし。更科日記に、二村の山の中にとまりたる夜、

大きな柿の木の下に、いほをつくりたれば、夜ひと夜、いほの上に、柿のちちか
かりたるを、人々、ひろひなどすと入り。これは、菅原孝標といひける人の女の
かけるものにして、さしも、遠き世のことにもあらぬを、そのかみ、なほ、旅のやど
りは、かゝることもありけるよとおもへば、常には、うたにのみよむ草枕も、あが
れりし世には、まことに、さることにてありけむ。かく、おもひつゞけなどして、
こゝろをなぐさめつれど、夜のふすまさへ、板のやうなれば、たへがたし、山吹屋と
いふ名のみ、いたづらに、あはれにきこえたりや。

秋風にみだれはてけり色にいでし春のむかしの山吹のやど

三日、朝、いさゝか雨ふる。宿のきたなさに、よへより、ねもやらで、夜をあかし
つ。

あはれなるものとはかねてきれ、どもさらけ草まくらかな。いとほらだた
しければ、今朝は、車にて、いそぎで出て立つ。よへねざれば、とかくねぶりがち
にて、大濱驛など、夢ぢにしてすぎぬ。矢矧橋などわたりて、岡崎にいる。三河國
八橋のあとといふところ、ゆくての左にみゆれど、えゆかず。

けふもまたよそにすぎけり八橋の名のみばかりをさゝわたりつゝ。十二時はかり、
赤阪驛にかゝる。鯉屋といふにて、まばしいこふ。この家、この里にて、いとふる
き家のよしにて、庭なども、木立ものふりたるに、清らかにかさはらひつゝ、やり
水したるなど、いとこゝちよし。さきつとし、すめらみこと、こゝをすぎさせ給
ふ時、この家を、行宮とさだめられしよしにて、今も、玉座など、そのまゝに、ま
つりおけり。おのれ、あるじの翁に、よみてつかはしたるうた、

家におへる鯉てふ名をばたのみにて君やめでたき瀬をのぼるらむ。こゝより、
又、東に入る。豊橋をすぎて、四時ばかり、新所につきぬ。こゝより、汽船にて、濱
松にわたる。けふは、風のふくともみえねば、船のながめいとよし。夕暮ちかうな
るまゝに、霧、いたく立てり。

夕ぎりにみえわかねども松風の音するかたや溱なるらむ。日くれて、船はつ。ま
ばしの間、又、ひき舟にて、行くなるよしへりければ、みな、川舟にのりうつりぬ。
その人々は、農夫あり、商人あり、職人あり、男あり、女ありて、いとこゝろせく、
ひびをいりへくるし。されど、おなじ舟の中なれば、さるも、まらぬも、うち

とけて、かたりあふ。月さへ、ちもしろうさしいてたり。

照る月のかげものるなりこゝろあひのとも綱むすぶ舟のたよりに」。かくて、のぼり行くに、堤づたひに、蟲、あまた鳴く。

ひく人にふねをまかせて居ながらに堤づたひのむしをきくかな
こゝろあらば綱手ゆるめよ松蟲のなける堤に今かゝりけり」。さ夜ふけて、濱松に
いる。

照る月のかげも淋しくみえにけり風ふきすさぶ濱松の里」。さて、この里、ふるくは、ひく馬野といふ野にて、萬葉集なる「ひく馬野にほふは原いりみだり衣にほはせ旅のさるしに」とあるも、このところなり。濱松の里も、和名鈔にみえたれば、もとは、このあたりの小き里の名にて、いとふるさもなるべし。さるを、家康公、ひく馬野のひくといふことをいみて、このところを、なべて、濱松とよびなせるなり。道にて、むしをきいて、

ものゝふのむかしを今にさのぶらむひく馬の野べにくつむむし鳴く」。こよひは、大米屋といふにやどる。このやど、いと清らかなり。さぞの夜のやどにくらぶれば、

天地のたがひとやいはむ。されど、ものごと、すべて、うれしき方よりは、つらしとちもひしかた、志のばるゝものなれば、年へて後は、なかなか、わすれがたみともなりて、まのふのかたや、なつかしからむかし。

四日、いさゝかくもる。朝とく起きて、岡部讓がもとをとふ。あるじ、いできて、なにくれとものがたりしつ。そこをいでて、二里ばかり、行けば、天龍川にかゝる。いと長きはしかれり。この川の源は、信濃の國なる諏訪湖のよし。川の名のいづれはあれど、海にいるまで、あらためざるは、この川のほかあらずとなむ。いにしへは、天の中川といひしよしなるも、更科日記には、天龍川とあり。いとふるさ名なるべし。こゝをすぎて行くに、並木のひまより、富士のいたとき、かすかにみゆ。うれしきことかぎりなし。

遠かたにけふみえそめぬふじの山ふもとのあたりいつかすべらむ」。見附、袋井の驛などをへてゆくに、雨ふりさぬ。

うまやぢの並木の松を傳ひきてたもとにかゝる秋のむら雨」。かけ川、日阪の驛々をすぎて、四時ばかり、小夜中山にかゝる。さて、この山のもとに、近頃、新道の

成りたるよしにて、そのかたは、坂も山もなく、車さへ、ことなくかよふよしなり。されど、おのれらは、名所古跡を探らむとて、舊道のかたをたどり行く。道、いとどかし。雨さへふりやまねば、

松風の音ばかりだにさびしきを雨もふりさぬ小夜の中山。かくて、上り行くに、むづかしげなる家、ひとつふたつ立てり。まばし休らふ。名物の館などくふ。夜啼石は、新道のかたへ、うつしたるよしにて、みえず。ゆくてに、野菊の花、おほく咲けり。

菊の咲く山路に今宵やどりなむちく露の間に千代もへぬべく。村山松根翁はく、菊といふ花の、ふるく、わが國のものにみえたるは、いまの世にもてはやす、大菊小菊やうのものにはあらで、ちひさき菊の、ちらちらと、山路にも、川邊にも、おのがまにまに、咲きみだれたるをいへるものにして、今の世にもてはやす、菊といふ花は、いつばかりか、こと國人のもてわたりけむ。むげに、ちかき世の事なるべしとぞ。げに、この考のごとく、うつほものがたりの、巻の名にちほせたる、玉のむら菊をはじめ、吹上のはまの秋風に、波のよするかとうたがひ、大澤の一もと菊に、

くれ行く秋ををしむなど、そのほか、あふ阪の關、うちいでの瀧、なきごの岡、たみの、島など、ところどころよみあはせたるも、みな、この花をいへるなるべし。そを、後には、おしなへて、野菊となづけて、よのつねの花のつらには、かすまへぬこととなりぬるぞ、いとくちをしきや。無間のかねのありといふ寺、みにゆく。いとものふりてみえたり。松風の音すみ、水のひときなど、あはれもすぎて、ものおそろしきところのさまなりと、源氏にみゆるも、この寺など、よくかな入りといふべし。鐘は、つねのことにならず。こゝをいいて、ゆくに、やうやう、くだり坂になりぬ。されど、道、いよいよさかし。

うちむれてかへる樵夫にこととはむ明日もこゆべき山はありやと。日さへ、くれかいらたれば、そのさびしさ、いはむかたなし。

夕風にひとつ落ちくる松かぜの音さへ淋し小夜の中山。からうじて、午後七時ばかり、金谷驛なる小澤屋といふ宿につく。夜ふくるまゝに、雨いたくふりまなる。ねまやらでわれは蒸のはむつれづれと雨さへ今宵ふる郷のそら五日、くもる。まだ、夜ふかきほどに、出て立つ。菊川にて、

いにしへのためしを今もきく川のふかきころをくみわたるかな。大井川にかゝるころ、そら、またくあげたり。されど、霧、いとふかければ、流の音のきこゆるのみにて、川のながめ、たえてなし。橋も、かゝりてあれど、先づ日の雨にて、ところどころ、ながれいにたるよし。今は、舟もてわたしぬ。

朝ぎりにみぎはもみえず大井川舟よぶ人の聲ばかりして。島田驛より、くるまにのる。藤枝、阪下などの驛々をすぎて、十一町ばかり、うつをや峠にかゝる。雨、いさゝかふりく。さて、道にて、

袖ぬれぬ人にあひけりうつ山ふもとばかりやまぐれしつらむ。この峠もとは、いとさかしくして、旅人の、いたく、なやみたるころなりしが、さるに、例の新ばりの道ひらけてより、隧道さへいてきて、いとかよひよし。されど、もとより、高き山路のことにしあれば、いとものすごうもぼゆ。

いかにして夕はこえむひるも猶木の下くらきうつ山道。けふは、いかなることにか、あつさ、いとたへがたし。衣も、みな汗になりぬ。三好のよめるうた、

たへがたきあつさなりけり大君はいづこのあたりみゆきまますらむ。こたび、すめ

らみこと、北海道のかたに、いましておはせしかば、けふのあつさにつけて、はるばると、そをちもひやりまつりし、そのまごころのほどさへみえて、いとめでたくなむ。三好ぬしは、詩を作るには、いたくすぐれてあれど、やまとうたよみたることは、たえてなかりしを、けふ、かくよめるは、三年不啼とかいへらむやうに、たくはへおきしにやあらむなどわらふ。このわたり、山、あまたあり。さるに、いづれも、みなさりひらきて、茶など、うゑわたしたり。今の縣令は、なべて、開拓に、ころをそゝがるよし。うつや、小夜中山などいふ、いとさかしき山路も、かく、隧道をひらき、あるは、新道をいとなみなどして、車さへ、こともなく、かよふこととはなりぬ。いといと、よろこばしきことにぞあなる。

たさいころまづが少女もうたふらむ山の奥にも道のある世と。鞠子驛をすぎ、阿部川橋などわたりて、十二町ばかり、静岡にいる。城廓など、みめぐりてみるに、木立いたくものふりて、あれにあれたり。すべて、このあたり、山も海も、とほからで、すみよかるへきところのさまなり。うとはま、あへのしま、まづはた山など、猶ゆかしきところども、多くきこゆ。久能山にも、立ちよらむとちも入れど、ことあり

て、えゆかずなりぬ。こゝより、車にて、出て立つ。浦安橋といふ橋あり。そをわたるとて、

波風のをさまるみ世に生れあひて渡るもうれし浦安の橋。午後五時ばかり、奥津なる水口屋につく。この宿、海に向ひて、みはるかしいとよし。さて、こゝにて、

海士の子は旅のあはれをさるやいかに清見が崎の秋のゆふぐれ。夜にいりて、いとさやかなる月、波の上にはさしいてたり。そのかげの、海原にうつれるが、波とともにうちくだけて、軒端ちかきみぎはに、うちよするさま、えもいはず。今宵、三好と共に、酒のむ。ちのれも、三好も、くしの神のちはひなきものなれば、いづこの里にやどりても、杯をとらむとだにあもはざりしに、こよひは、いたくゑひぬ。われながら、をかしくもあるかな。かりをきいて、

ちくれぬてき、こそわぶれ都へといそぐみそらの初かりの聲。ふる郷へ、ふみちくらむとて、その末に、

父母のこゝにしまさばさ、つともかたらむものを初かりの聲。夜ふくるまゝに、波の音高くて、えもねず。

さらぬだにぬられぬものをさら波のよする奥津になにやどりけむ

六日、朝とくあさいてて、海原をみわたすに、波、いと平かなるに、朝日のかゝやきたるなど、いと清らにみえたり。かゝるところに、いきのかぎりすみなば、いかになどちもへど、かひなし。七時はかり、そこを出て立つ。清見寺にまうづ。關のあとは、やがて、このあたりなるべし。八時すぎるころ、くら澤驛なる望嶽亭にて、まばし休らふ。この亭、名にちへるふじは、さらなり、三保の松原など、はるばるみわたされて、そのけしき、畫にかけらむやうなり。

藻志ほやくあま少女と身をかへて清見が崎にすま、しものを。酒など、いさゝかのむ。魚も、この海のならば、味、いふへうもなし。ことによさは、貝やさなり。こゝをいて立たむとて、

立ちかへり又もきてみむ清見がた清きなぎさによするさら波。こゝより、車にのる。さつた峠、道の左にあり。萬葉集に、いはき山とよめるは、この峠なりとか。手兒のよひ坂も、こゝをちとて、ちもひよるところなし。蒲原驛などすぎて、ふじ川の渡にかゝる。

ふじ川やわたしの舟のいてぬまにのりあぐれじといそぐたび人。この川、ながれ
いとはやし。舟なども、かいをとりて、たえず、水をはらふ。そのさま、たえて、み
なれぬふりなり。かいは、萬葉集にも、「あきつかいいたくなはねそ」とありて、はぬ
るものなれば、この舟の、かいつかふさまなど、よくかなへりといふべし。さて、
ここに、

水鳥のむかしはいかにふじ川や今猶さびしきの秋風。いさゝか行くほどに、や
がて、田子浦にかゝりぬ。うち出でてながむるに、ちのづから、赤人の昔も、あも
ひあはせられて、そとろにあはれなり。

ふじのねにはやまら雪はつもるらしや、袖さむし田子の浦風。いほごまのこぬ
みの濱、袖師の浦など、なつかしきところなり。また、車にのる。吉原、原の二驛
をすぎて行くに、このわたり、なべて、海べなれば、潮風はげしからむ。あもしろき
松、あまた、道のほとりに立てり。今日は、そらも、いとどこかなれば、淨しまが原
など、ながめいとよし。

さ夜ふけてわれはみに來ぬ久方の月のみ舟のうきしまが原。沼津驛をすぎると

さ、ふじをみて、

この里にすみてもみばやふじのねの高さをものがこころにはして。道にて、鐘の
音をきく。

かねの音のひびきはそらにきえゆけどさびしさ残る秋のゆふぐれ。午後四時ばか
り、三島の宿につく。宿の名を、相摸屋とぞいふ。湯あみ、飯たうべなどして、三好と
ともに、三島のやしろに詣てぬ。宮居、いとすがすがしう立てり。さて、この三社の
祭神は、釋日本紀に、三島の大山祇神云々、そのほか、纂疏をはじめ、諸書に、この
神のよしみゆめれば、まさしく、大山祇神なるを、平田翁の説おこりてより、事代
主神のごと、なべて、世の人は、あもひあやまり、ひとたびは、この神にさだめられ
しも、もとより、そのことのひがことなれば、今は、また、大山祇神に、あらたま
りぬるよし。そもそも、事代主神は、出雲の三保のみ崎にましますば、もとより
あだしところにます、へうもなし。まして、かゝるところに、ましますいはれあらむ
や。平田翁の、世にちはせしころは、祭神も、わきがたかりしなれば、かく、あや
まられしものなるべけれど、今の世になりても、その説を、なにくれと、きひて、と

まことするともがらもありげなるは、いとものいともいみじきことになむ。拜殿にのぼり、いさゝかのものさしげて、額づく。神官いできて、御酒などたうへます。宮司秋山光條をとよ。なにくれのものがたりして、かへる。まばしありて、宮司のもとより、今宵、歌會あればとて、ふみして、よびにあこせたり。あのれ、ひとりゆく。人々、あまた集へり。兼題は、寄筆述懐とぞいふ。あのれ、

おもふことかきながしやる水莖も身のうき草はとそはびりけり。當座は、月前後といふ題なり。

いかだしもころやすくやくだすらむ月のひかりのさすにまかせて。また、題をわかつて、うたよむ。あのれ、山家秋といふをえて。

たく柴をよそにもとめてかへりけり軒ばの山の紅葉せしより。あのれ、人々によみて、みせたるうた。

思ひさやうきことまげき旅ねにもかゝるうれしき宵のありとは。このほか、あまたよめれど、こゝにはまざるをす。十二時ばかり、宿にかへる。今宵、風とこもむし。夢だにもむすびびりけり旅ごころもすそ野の原に風すまぶころ。また、おもひつゝ

けたるうた。

あはれともたれかみしまの里にきてひとりつれなくものおもふかな。この宿の前も後も、妓樓なるよしにて、終夜、このわたりの田舎人どもぞまひさわぐ。三味線の聲の、たえまなきがうるさくて、いもねられず。

いひまらずかなしくおもふ秋の夜にころなくうたふ人もありけり
七日、いさゝかくもる。けふは、はこねをこえむとて、はやういで立つ。並木のあたり、まだ夜ふかければ、なまよまのむし、草むらことにすだく。中にも、すむしのごうごうしきなど、ちのづから、ふる郷のことおもひ出されて、あはれなり。ふるまことにかはらびりけりはこね山あぐるあしたのすむしの際。ふもこより、半里もまねとおぼしきころ、夜、またくあけたり。

たび人のともし捨てたる松の火のけぶり寂しきこの朝けかな。山中の宿にて、立ちつゞく松の下道くからむきつねなくなり山中の里。こゝをすぎて、やゝのぼり行くに、いと清らかなるところあり。いかゞなしゝところぞと、かたはらなる女にとひけるに、こは、先つとし、すめらみこと、この山をこえさせ給ふをり、い

こはせ給ひしところとぞいひける。いとかしこしと、立ちよりてみるに、富士はさ
らなり、遠近の山、雲の中にあらずひ立てり。川などの、百重山の中を、をれめぐ
りてながるゝを、未かけてみれば、駿河、伊豆の海、空にのらなり、また、遠近、烟
の立つをみれば、こゝらの里にて、ちかさは、民家などのみゆ。すべてのさま、筆
には、つくしがたくなむ。このながめに、あしのつかれも、かつは、忘れたり。またの
ぼり行くに、このあたり、なべて、杉村立ちつゝさ、小鳥の、梢にあざる音さへ、な
にとなく、さゝなれぬこゝちす。

かし鳥の梢にあざる音さへもたまたまさけば寂しかりけり。やゝ高くなるまゝに、
おのづから、木もすくなくなり、右も左も、尾花のみにて、吹く風にうちなびくご
ま、いと寂し。

尾花生ふる道ぞさびしき吹く風にたびゆく人もみえがくれして」。高ねにて、

たかねにもはやまつらむかはこね山あしのもとゆく雲もありけり。「十一時ばかり、
箱根驛なる石内屋につく。この家、湖水にのぞみて、みはるかし、いとよし。富士
山の、海ごしにみゆるなど、けしき、ことさらなり。

玉くしげはこねの海をかぐみにて姿をよそふふじの山姫」。あるじ、書畫帖、たにぞ
くなど、とりいでてみす。おのれらにも、一筆こひければ、詩、やまと歌など、おも
ふまゝにかいつく。外國人、三人ばかりきて、おのれらの文字かくを、みてあり。
こは、先つ日より、こゝにやどりをるものよしにて、やまと詞もつかふよしなれ
ば、なにくれのものがりして、なぐさみぬ。おのれ、富士の山をさして、かばか
りの山、貴國にもありやとへば、高山はおほけれど、かくばかり、うるはしきは
たえてなしといふ。

外國になしとはまれどありやともほこりてみむか富士の神山」。ひるげものして、
そこをいづ。このあたりの家、軒ばごに、七草をあなじさまに、花瓶にさしおけ
るがみゆ。いといぶかしくおもひたれど、とひもやらで、見てのみすぐ。山、いと高
ければ、くもさりはるゝ時なし。

白雲にみえずもなりぬ先立ちしひとはいづこのあたり行くらむ」。もと、關のあり
しところにて、

はこね山せきはあとなりぬれどなみだゆるさぬ秋のゆふぐれ」。箱根權現に詣

づる道あり。立ちよらむとあもへど、遠きよしなれば、さしあきつ。

みやしろはいつこなるらむ苦むし、鳥居は道にちかくみゆれど。このわたり、いはゆる米家の山水めきて、いとさかしきみねどもの、立ちつらなり、雲などの、されはなれなどして、すぎ行きたる、又めづらし。

はしり行く雲さへまげしはこね山ふもとのあたり雨やふるらむ。こゝより、やうやう、下り坂になりぬ。されど、道、いよいよさかし。いたくたどりなやむ。道のかたはらに瀧あり。まばし立ちとまりて、

腰かけむ岩がねもがなくなりかへしながめてゆかむたきのきら絲。俄に、そらかさくもり、雲きり、立ちよらむがりて、道、みえずなりぬ。

草まくらむすばむかたも白雲の立ちかくしたるこの山ぢかな。雨いたくふりく。ころも手もぬれとほり、立つだにつかれて、わびしつらさ、いはむかたなし。まばし、まづが家の軒ばに、たゞすみぬれど、日くれて、宿につかむも、本意なければとて、また、雨の中をゆく。かゝる山路のことなれば、さらば、こゝろぼそく、旅のつらさ、あもひあはせられたり。まばしありて、雨はる。

いかにしてわれはきにけむはこね山みねに立ちとふきら雲のあたり。また、道にて、あもひつとけたる。

みるまゝになぐさみぬへき海山も旅と思へばかなしかりけり。午後四時すぐころ、湯本なる福住といふにつく。こは、はこね温泉七所のうちにて、家など、煉瓦もて作り、そのさま、いとうるはし。ちのれらは、三階にのぼりぬ。庭のあたりをながむるに、このわたり、山水にとみ、けしきのをかしさは、にるものなし。山にも、川にも、いと大いなる石、あまたそびえたり。その形は、屏風をうちかへしたるごときあり、なめらかにして削りたてしごときあり、ふりはへて、岩もて、岩につみかさねたるごときあり、ちのづからなる石の門あり。往古、大木のをれたふれて、化石したるごときさへあるに、石のわれめとまほしきところより、松などちひ、昔なめらかにして、いく千年をかへにけむとも、はかりがたきあり。谷川の流、松風の音など、すべて、みるものさくもの、世ばなれたることちす。

ひとつだに家にもがなとももふかな高ねのいはほたにの松がえ。夜にいらて、温泉に在る。さすがに名高きみ湯なれば、なべてのさま、いとひろらかなり。湯つぼ

も、三つあり。清らにまつらひたるさま、いふばかりなし。夜ふけて、あるじいしく。この人は、御國學するよし、かねてより、きき知りたれば、こしかたの事はさらなり、みちの上のものがたりども、あかずものして、かつよろこび、かつなげまつ、時をうつしぬ。ひるのほどは、雨もふりぬるを、夕つかたより、そらにはかにはれ、月、いとさやかにさしいてたり。今宵、十五夜のよしききて、

かぞふれば今宵ぞ秋の最中なるいくかへにけむ東路の旅。今ちもへば、高ねにて見て來し、家々の七草も、今宵の月をまつるまうけなるべし。ちのがくにあたりにて、かた田舎にては、箕のなかに、いろいろの草花を、うつくしうまきなべて、その上に、いろいろのくだものなどのせて、月をまつることあれば、これも、かれも、なにか、ふるさつさまの、のこりたるにてもあるべし。夜ふくるまゝに、川音、いと高し。

秋の夜のふけ行くまゝに岩ばしる水のひびきの空に澄みぬる

八日、くもる。とくあきて、温泉にゐる。手洗ふ水さへ、いとよければ、なにとなくこゝちよし。主人、けふ、ひと日とばかりてよなごらふ。されど、まひて、出

て立つ。山ぢなれば、道、いとくらし。

さ夜ふかきこゝちこそすればこね山あけての後の杉の村立。高ねをみかへりて、

玉くしげ二見の山やあけぬらむはこねのみねのけしきあもしろ

みねの松みえみかくれみあけわたるはこねの山のさりのむらむら。や、行くほどに、いづこの里ならむ、木の間より、ところどころみゆ。

里ちかくなりけらしなはこね山杉の木の間にけぶり立つみゆ。八時ばかり、小田原にかゝる。こゝにて、

浮雲ははこねの山にかゝりけり今かまぐれむ小田原の里。北條氏の墟墟などみに行く。世にきこえし名城なれども、今は、石垣の、ところどころにのこれるのみにて、すべてのさま、いと寂し。

あれはてし大城のあとをたづぬれば松の梢に風すさぶなり。酒匂川をわたる。この川、ふるくは、まりこ川といひしとぞ。十六夜日記に、まりこ川といふ川を、いと暗くて、たどりわたる。こよひ、さかほといふところにとどまると、みえたれば、酒匂は、このところの名にて、川の名となりしは、後のことなるべくや。曾我物語

にも、まりこ川みえたり。その名も、きくすてがたくて、
をとめ子かもてはやすてふまりこ川名もなつかしくきくわたるかな。梅澤驛にか
ゝるころ、雨、いさゝかふりく。

春ならば鶯のぬふかさをだにかりてすぎなむ梅澤の里。二時ばかり、大磯驛にか
ゝる。こは、いにしへ、とらといへる女の、すみけるところとて、名だかき里なり。
こよろぎと、歌によむも、このわたりを、なべていふなるべし。鴨立澤に、まばし
立ちよる。今は、鴨の羽音もきこえざれど、西行のむかしのまのばれて、いとあは
れなり。

鴨立ちしその古のあはれさのなごり身にまむ秋のゆふぐれ。こゝより、車にのる。
五時ばかり、藤澤驛にかゝる。道にて、

ふる郷を立ちいでしより旅ごろもなれても寂し秋のゆふ風。この驛より、鎌倉に
かよふ道あり。車を下りて、そのかたにたどりゆく。

追分の尾花がくれの石文も見えみ見えずみ秋風をふく。かくて、野原をすぎ行く
に、尾花、こゝら立てるが、みなおなじさまに、うちまねきて、いづかたに、より

はつべうもあらず。

いづかたにふしどさだめむうちまねくを花のそでのちほくもあるかな。あまたの
をとめに、かくばかりまねかれなば、いかにうれしからましなど笑ふ。くれがたち
かうなりたれば、いときて行くに、雨さへ、いたくふりいでたり。

いかにせむ道はまどひぬ日はくれぬ雨もふりきぬ風もふきぬ。大佛坂などすぎ
て、からうじて、鶴岡八幡宮のもとなる、三橋屋につく。夜ふくるまゝに、雨ふりま
さる。鳴く虫の音も、たえだえなれば、

さくにだに袖はぬれけり村雨のふりよわりたるすゝむしの聲

九日、朝とく起きぬ。雨、なほやまず。戸などおしひらきて、見渡すに、なべて、
ものさびしく見えたり。

とふ人のなみだなるらむ鎌倉の里寂しくも秋雨ぞふる。七時ごろ、そら、にはか
に晴る。八幡宮に詣づ。宮居、山によりて、いと高し。この山、ふるくは、大藏山
といひしを、後に、大臣山とあらためたるよしなり。藤原鎌足公、かまを、この山
に埋められしより、この里を、かまくらといふよしなれば、大臣山も、公をさした

るなるべし。さて、この宮、鎌倉創業のときより、あつくまつれる宮なれば、すべ
てのさま、いとうるはし。社務所に行きけるに、くさぐさの寶物を見せらる。音に
きくにたがはず、めづらしきものども多かれど、こゝには、をかかず。社前に、いた
くものふりたる銀杏の木あり。こは、公曉の、身をひそめたるところとぞ。石階を
下りて、左のかたに、神樂殿、若宮などいふあり。この若宮は、靜姫のまひせしとこ
ろのよし。今は、その人もみえず。たゞ、かたはらに、柳一本立るのみにて、なに
となく、ものあはれなり。

くりかへし遠きむかしをまのふらむみだれてみゆる青柳の絲。源平池といふ池あ
り。この池の蓮、紅白の二種あるよし。花咲くころは、うつくしからむ。今は、秋風
に吹きみだれて、みるかげもなし。

さだめなき世のありさまをはちす葉に知らせてもふく秋の風かな。これより、小
袋阪をへて、建長寺にいたる。こは、五山の第一にして、山もまづかに、水も清く、
庭の松もいと高く、苔などもめらかにして、ものみな、ふりにふりて、さすがに、
名高き寺のさまなり。圓覺寺、長壽寺などいふ寺あり。皆、五山のうちなり。圓覺寺

には、北條貞時の鑄たる、いと大いなる鐘あり。長壽寺には、高氏の像あり。墓もあ

りつれど、高氏は、等持寺に葬るとあれば、この墓うたがはし。扇谷、假粧坂、富
士谷などすぎ、壽福寺にいたりぬ。こも、五山のひとつといへり。この寺に、源右
府の墓あり。二位尼のはかといふもあれど、さだかならず。こゝより 高氏の館址
をみて、長谷村にいづ。こゝは、さのふすぎにし道なれど、夜にいらてのことなれ
ば、なにごともおぼえず。今日は、雨もふらざれば、立ちよりて、大佛をみる。さ
さしにまざりて、大いなるものなり。三好、こをみて、かゝるもの、世にのこしお
くもかひなし。はやく鑄て、大砲を作らば、いかばかりよけむなどいふ。げにさる
ことなり。極樂寺坂をへて、稻村崎見に行く。けふは、風もなきぬれば、海上、いと
たひらかに、江の島など、波のあなたにみえて、目もはるなり。袖が浦にて、

おのづから落つるなみだにまぼりけり袖が浦の秋の夕ぐれ。由井が濱をみめぐ
りて、午後五時ばかり、もとのやどにつく。けふ見てこしところ、あまたありつれ
ど、そは、別にものせしかば、この日記には、そのあらしをかいつくるのみ。夕
つかた、また、八幡宮に詣つ。

千木の上に鳴く神鳩のこゑさむし八幡の宮の秋のゆふぐれ。三好、今宵、ねもや
らで、南朝に、こゝろづくし人々を、詩に作る。明日、鎌倉宮に納めむとてなり。
おのれも、うたよむ。そのうたども、

藤原師賢卿

玉だれのをす吹きあげし風なくばよしの、花はちらざらましを

藤原藤房卿

かさぎ山松のまづくにぬれしよりつひにかわかぬ君が袖かな

准后親房卿

吹く風を常陸の山にせきとめて君やよしの、花まもりけむ

北畠顯家卿

みちのくのあたらわか木の花櫻阿部野の風のなにさそひけむ

千種忠顯卿

いかにそめしこゝろちぐさの花ならむふく北風になびくともなき

楠正成朝臣

色香をば若木の花にうつしおきておのれちり行く櫻井の里

楠正季朝臣

七たびといひし言葉は一すぢに君をおもふのきはみなりけり

楠正行朝臣

櫻井の里のなごりの色よ香よやかてよしの、花と咲きにけり

楠正儀朝臣

まばしとて菊の下水にごりけむくみまゐる人に末はまかせて

新田義貞朝臣

はかなくもこしぢの雪と消えにけりよしの、春をおもふばかりに

新田義興朝臣

ものゝふの名はながれけりあづさゆみ矢口の波に身はまづめても

兒島高德朝臣

さくら木にこゝろもふかくそめてけりよしの、宮の春をまらせて

名和長年朝臣

うきくもを名和のうらかぎふきはらひ船上山に月出てにけり

結城宗廣朝臣

いせの海にたゞよふかりぞあはれなるよしの、春の花もみずして

菊池武時朝臣

五月やみあやめもわかぬつくしぢにひとりねを鳴く山ほととぎす

菊池武吉朝臣

もろともに散らば散らむとみなと川菊のゆかりの香ぞながしける

菊池武光朝臣

露霜のそのうきこともきらぬ火のこゝろづくしにほふきくかな

村上義光朝臣

かぐはしき名をば残して吹く風にちるかよしの、山ざくらばな

十日、そらくもる。宿を立ち出で、辻町をすぎ行くに、北條氏の館址。そのほか、たれの館址、かれの館址とて、ところどころにあり。この地、覇業のさかりなりしころは、いかにありけむ、今は、人家も、いといと、すくなくなりいにて、田のみ

おほかり。そのさびしさ、いふばかりなし。

うらさびてみるかげもなしまづの女がおしねかりほすかまくらの里」。滑川など見めぐりて、頼朝の墓のあるところにいたりぬ。めぐらしたる石垣もくづれ、その他、いたくあれはて、みるかげもなし。大江廣元、島津忠久の墓みにゆく。なべてのさま、いとうるはしく、頼朝のはかのたぐひにはあらず。こは、薩長二公の遠祖なればなるべし。鎌倉宮に詣づる道にて、

大前に詣てばいかに道すがらはやぬれかゝるわが旅ごろも」。宮前にぬかづきて、今日こゝにまぬびまをさむこともなし落つるなみだをたゞきこしめせ」。拜殿のかたはらに、小さ社、二つあり。右なるは、南の方のよし、左なるは、村上義光のよしなり。こは、いづれも、よく、宮につかへまつりて、功あれば、ことさらに、こゝに、まつりあけるなるべし。三社のうらのかたに、宮をこめまつりし土窟あり。社務所にいへば、みするよしなれば、立ちかへりきて、あないをこひけるに、神ぬし二人、いできて、みせつ。おのれら、拜み見るに、その中いとくらくして、さだかにはみえねど、かの土蜘蛛といふものにて、すみたらむやうなるさまにして、常人の、片

時だに、すまるゝところにはあらず。あたりをみめぐらすに、苦いとなめらかにして、今も、血にそみたらむやうなり。そのかみをちもひまつるにも、かしこき、いふばかりなし。そもそも、天下をまろしめす日の御子の、かゝるいはほの中にはせしとは、いかなることぞや。げに、世のみだるゝばかり、はかなきものはあらずかし。あのれ、その世に生れたらむには、かゝるはかなきうきめを、見せまつらむものなどを、いたみなげけど、かひなし。

み楯ともならましものをそのかみに生れぬ身こそくやしかりけれ。かの唐土にて、忠臣とよばれし岳武穆の廟をたて、その前に、秦檜の銅像を作り、そを、さかさまにかけて、詣てくる人々して、いたく、はぢみせたるよし、彼の書にみえたり。それにならふとはあらねど、あのれ、もし、志をえば、きのふ、三好の、大砲に作らむといへりし、大佛をうちこぼちて、高氏兄弟の像を作り、この宮の大前にあきて、はぢみせくれむ。げに、にくみてもにくみても、あまりある逆賊にこそ。また、社務所にかへりきて、よへの詩歌をたてまつりぬ。高時のはかは、この宮の後のかたにあるよし。されど、今は、道もたえ、あないをたのまては、わきがたきよしなれ

ば、さしあまつ。こゝより、金澤道をたどり行くに、一覽亭といふ亭、高きところ
にあり。ながめよきよしなれば、まばし立ちよる。ありとある浦のけしき、一目に
みわたされて、一覽亭の名も、げにもとどうなづかるゝ。あるじ、金澤の八景など、
指さして示す。

そや野島こや平潟とたづねてみみるめをまばしこゝにかりつゝ
内川も乙艦も瀬戸もみてゆかむ洲崎のあたり浦づたひして。こゝをいて行く
に、いづれも、ながめことにして、そのけしきちもしろし。十二時ばかり、金澤なる西
村屋につく。こゝより、舟にのる。雨はさゝかふる。はじめのほどは、かきなど、
さしかけてありつるも、舟はづるまゝに、雨、いたくふりまぐり、風は入、はげしうな
りつれば、かさもふさやられ、ころもても、みなぬれとほりて、そのわびしき、いはむ
かたなし。このわたり、けしきの、ちもしろくをかきさところ、あまたみゆ。はれ
たる日に、ながめなば、いかばかりよけむなどかたりあふ。されど、遠近のままな
ど、みえがくれて、雨のけしきも、なかなかなり。二時すぎるころ、横須賀につ
く。造船所にゆきて、その職工のいとなみ、あるは、器械などみめぐるに、いづれ